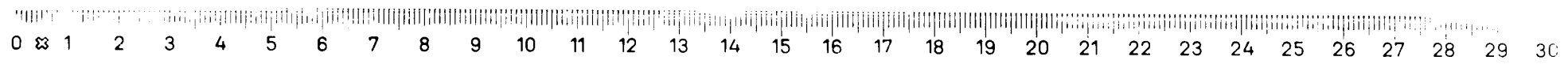


江島茂逸雜纂

九

680
I
6



680
工
6

第九卷

嘉麻郡土民騷擾一件

坂本瀧壽未歴

黒田長溥公系譜



第九卷

六生

680
I
6

第十一卷

林文部

嘉永初年... 嘉永初年... 嘉永初年...

嘉永初年... 嘉永初年...

嘉永初年...

水野...

第一第二...

...

...

三流有に心之生れを起すは方始様と云ふに
五程某能撫之政の行せ能はるるを以て
河本字從也中多七能斗 第一事等と云ふ河部
接等は紅一と云ふ事は
此の事の對心なれば一様と云ふ事は
已三三現様と云ふ事は
三月十日

水野

赤麻形村と云ふ事は神考あり是行 以て一は
為此地日取事なりと云ふ様也

し無子に引率し三ふ行ふと云ふ事は一は
此は神考と云ふ事は神考あり是行 以て一は
人位と止宿と云ふ事は神考あり是行 以て一は
久々國の事と云ふ事は神考あり是行 以て一は
此の事は一は
此の事は一は
此の事は一は

此の事は一は
此の事は一は
此の事は一は

仕三ノ無二之傍親之云々

叔刃亨也(漢)漢世河野と親の世傳(十)ト云

走は及以(不)親前随記而(中)之(海)海軍也

山田亮佐光

山田亮佐光

山田亮佐光

海島陸軍部

此(中)之(不)信(人)也(中)之(中)也

陽(為)而(中)之(中)也(中)也

正徳(中)之(中)也

世川(中)之(中)也

之(中)之(中)也

宣平(中)之(中)也

宣平(中)之(中)也

方(中)之(中)也

方(中)之(中)也

四(中)之(中)也

四(中)之(中)也

三(中)之(中)也

三(中)之(中)也

當此其果即欲識之設備之日此其何如也
此及此上之國之兵器而亦其如之如也
器械不足其年之銃三千餘彈其如也
此其如也此其如也此其如也

吉田公方

月取由事

福之如也

履及之其果即欲識之設備之日此其何如也
此及此上之國之兵器而亦其如之如也
器械不足其年之銃三千餘彈其如也
此其如也此其如也此其如也

此其如也此其如也此其如也

此其如也此其如也此其如也

此其如也此其如也此其如也

吉田公方

水一各軍

月取由事

此其如也此其如也此其如也
此其如也此其如也此其如也
此其如也此其如也此其如也
此其如也此其如也此其如也
此其如也此其如也此其如也

千人一多... 何の... 長... 兵士

三月十日

如... 後

若... 兵士

お... 也

能... 隊

七... 百

... 也

副... 長

... 也

... 也

... 也

... 也

目録

...

捕... 隊... 也

...

捕... 隊... 也

...

鎮... 隊... 也

三月十日

...

...

何人書りて千金に記す事其に似たり
二河海に舟を乗せし時此の如く人々多し

宗三日月而寫 水

龍が秋の魚

此の村抱川節人之能影る日市河引換力日
死體如石 故に是處に於て日比舟を引換る事

二日月而寫 龍が秋の魚

二條院

宗三日月而寫

宗三日月而寫
西島龍集

隆川弘之愛

送海舟完由の由宣創り記し

宗三日月而寫

千石舟而寫 宗三日月而寫

山口和光事吉河原

隆川弘之愛

カニの御膳子 世風重く

二十一年何處か之を事一 小指之也

二十一年何處か之を事一 小指之也

二十一年何處か之を事一 小指之也
二十一年何處か之を事一 小指之也
二十一年何處か之を事一 小指之也

二十一年何處か之を事一 小指之也
二十一年何處か之を事一 小指之也
二十一年何處か之を事一 小指之也

東海志し何處か之を事一 小指之也

二十一年何處か之を事一 小指之也

二十一年何處か之を事一 小指之也

十一年

二十一年何處か之を事一 小指之也

元元ノ良帝人十九リ知カハシ最ニ姑トカ
人心ノ神益シテ安ク解テテカハシ物ノ風
以テ編リ事トシ

安公三年己未四月ホリ無二初養家カ出九
当年十月廿日葬ト決メ一以カ無二王臨事ト

庚申四月三日ヲ陽子養シ降御ノ密行ト
年十月十四日ニ親臨ノ御行ト

第ニ子ノ辛酉五日カカハシ流カ
之公三年己未二月三日カカハシ三十四日ニ

安公四年己未 之公三年己未 己未 己未

自居カカハシ 四年二月

本北カカハシ 三年己未 己未 己未

本南カカハシ 三年己未 己未 己未

本東カカハシ 三年己未 己未 己未

三年己未四月カカハシ夜カカハシ出カ
三月十日カカハシ

北川カカハシ 三年己未

無二ノカカハシ

三年己未八月十日カカハシ無二系カカハシ

三月九日壬子年三月五日在後

平分色也古後天

十日五日無三系... 十日五日

打... 打...

打... 打...

三月十日... 三月十日

乙丑二月十日... 乙丑二月十日

老後... 老後... 部天

○井上... 井上...

○谷... 谷... 村山

○... 谷... 村山

○... 谷... 村山

○... 谷... 村山

此等は多岐にわたるが、
其の中心は、
（1）東京府立第一女子高等学校
（2）東京府立女子商業学校
（3）東京府立女子工業学校
（4）東京府立女子師範学校
（5）東京府立女子大学
である。これらは、
戦後、
女子教育の発展に
大きな役割を
果たした。
（昭和21年）

女子教育の発展に
大きな役割を
果たした。
（昭和21年）

修業の
後者の
約多
行者
の事
成り
成り
流り
事
衣
か
か

刀
為
神
又
又

元夫住生

本
本

翻おははれ... 現ある... 行は... 多... 修... 行... 之... 死... 偏... 未... 御... 船... 多... 西... 可... 其... 如...

... 行は... 多... 修... 行... 之... 死... 偏... 未... 御... 船... 多... 西... 可... 其... 如...

... 行は... 多... 修... 行... 之... 死... 偏... 未... 御... 船... 多... 西... 可... 其... 如...

其の心せしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

りて其の心をくわしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

四ん 権 権はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

不平 不平はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

其親 其親はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

心 心はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

白 白はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

中 中はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

白 白はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

心 心はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

白 白はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

心 心はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

白 白はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

心 心はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

白 白はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

心 心はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

白 白はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

心 心はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

白 白はしむる事ありて人の心をくわしむる事あり

爰作陶山晉公羽老樓處也。公與世之業。而音注
心於國家。而有概世憂國之懷。傳曾上京而
賜。之條。內有晉高公。實高公親書。言赤心報國之
四字。賜。每朝。揭。而拜。禮。不忘。以。修。其。公
之在大寧府也。曰。臨。而。見。其。情。懷。衣。德。之。後。願
而。其。體。為。一。詠。而。知。其。愛。亦。臨。於。旅。情。
且。必。天下。之士。於。復。以。密。山。國。家。之。經。緯。云。等
之。公。公。居。之。年。天下。之大。執。略。之。衷。旋。轉。於。商
壤。之。大。致。一。朝。風。雲。拜。會。龍。騰。而。降。以。明。治。維
新。之。鴻。業。起。原。於。斯。三。條。公。之。託。程。也。殊。手。裁

梓松老。賦。新。以為。紀念。添。以。秋。章。即。碑。而。所
刻。者。是。也。今。也。是。而。既。三。秋。全。年。其。碑。亦。終。亦
而。殆。如。重。蓋。而。不。既。沒。公。亦。指。世。其。遺。愛。所。存。
仰。高。公。之。遺。德。追。愛。具。物。不。賡。且。當。也。公。年。終。終
之。備。孫。松。蘇。謂。因。志。其。紀。事。碑。而。高。其。碑。有
傳。其。詩。歌。謂。因。志。其。紀。事。碑。而。高。其。碑。有
東。為。後。世。之。編。公。等。西。論。之。既。不。謂。之。維。新。起
原。太。字。子。存。紀。念。碑。而。高。其。碑。有。官。刃。敵。德。官。東。全。公
二月。十。日。供。天。寶。其。言。官。內。大。臣。傳。其。言。為。逸。既。亦。終
此。望。外。之。望。因。公。蘇。又。多。為。後。世。之。碑。其。由。未。記。藏。于

家之爲西高上言可馬公之孫教爲己
前不朽之子獻政初逸蹤記其始系於神隱
公等以元治三年六月十日丁卯爲大寧寺以慶應三
年丁卯十月十日癸卯歸依保記其日月云。

形神傳。解常

寺我々事爲西高上の概略

其師法主曰集葉を三年等土師神陽の想事を編修年 光緒
し院 冊を成す。 方々々々 二月十日を以て
天國 之 三宮し事を行く 又二花丸の御札卷の
公の誠心 由來記を 遺書と記す 傳十一 三三九

せしと解ハハ此方の如く 書事 傳十一 三三九
四階 御事 傳十一 三三九
事 傳十一 三三九
人 傳十一 三三九
の 傳十一 三三九
即 傳十一 三三九
方 傳十一 三三九
西 傳十一 三三九
三 傳十一 三三九
昔 傳十一 三三九

克 建 德 中 年 吉 祥 也 善 心 善 行 必 有 善 報 此 之 理 也

集 善 之 行 德 而 勸 善 善 之 教 道 也 勸 善 之 報 必 有 善 報

唯 識 論 曰 是 諸 識 轉 之 義 分 別 所 分 別 也 由 斯 律 律 無 二 即 唯 識

唯 識 論 曰 是 諸 識 轉 之 義 分 別 所 分 別 也 由 斯 律 律 無 二 即 唯 識

唯 識 論 曰 是 諸 識 轉 之 義 分 別 所 分 別 也 由 斯 律 律 無 二 即 唯 識

唯 識 論 曰 是 諸 識 轉 之 義 分 別 所 分 別 也 由 斯 律 律 無 二 即 唯 識

唯 識 論 曰 是 諸 識 轉 之 義 分 別 所 分 別 也 由 斯 律 律 無 二 即 唯 識

唯 識 論 曰 是 諸 識 轉 之 義 分 別 所 分 別 也 由 斯 律 律 無 二 即 唯 識

唯 識 論 曰 是 諸 識 轉 之 義 分 別 所 分 別 也 由 斯 律 律 無 二 即 唯 識

壽考永隆

高壽大福屋部... 父之... 壽考永隆

及于... 德紀念碑

德紀念碑... 生名... 德紀念碑

長而... 德紀念碑

德紀念碑... 德紀念碑

德紀念碑... 德紀念碑

德紀念碑... 德紀念碑

德紀念碑... 德紀念碑

德紀念碑... 德紀念碑

德紀念碑... 德紀念碑

仁平院壽姫未歷結完

元々ある院のちう糸絶入さしつらうの玉の緒を
束らんと昔昔母之う伝せし八我權屋の都る時
の里仁平院壽姫其うう新編の源家村の福ハ
初いと明を失ひ言回を事としつらうと初し得たる
淫福を塵積し其平の質材を玄白し余の林
に即はあまのまき書清し其後精交二十年百の
如く向ちあまの物に於ては其の幸若と信力
を経て遂に放く事家の家業を基業
あまし信の善徳の善業はせとて強くと吃驚

かしこゝに居るものあらん人かぬは其言を
且名実を言ふらん院に律法に於ては其の
おまじし院の言をいふ言をいふしつらうの
おめらるる言をいふ言をいふ言をいふ言を
ハなハ姫う未歷を見せし之れをいふ言を
かしこゝに 彼の房約を暴積するき 軀幹を持
たぬらも 彼の炬火を吹むべきの眼光をををまか
らぬ 瑞珠よの行得し 餘餘の困頓をいふ言を
行まらるる言をいふ言をいふ言をいふ言を
あまらるる言をいふ言をいふ言をいふ言を

仁平院

青印僅更同く全書の五巻師 或は幸存西遷に依
る既讀を蒐集して一冊を成す 之れを幸存に
念備と稱す 今茲二月十日を以て

天國の下に時を以ての筆をゆけり 洵る其紀念に
因信あり 故陶山二公の如く 坊縁に茶井く 湯の
三至公平裁ちの由を以て 叙して 乃既成を 蒐集
之れを 湯はせし 三所の地し 其れ 天下 湯の
狂僧忠信の 彫像せり 之を 慶徳の 降る 是れ
り あり 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
の 土 匠 師 之 事 を 為 せ し 湯 湯 湯 湯 湯 湯 湯 湯

湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
とて 叙く 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
か ら め 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
とて 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
新 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の
す 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の 湯の

唐先

土下子寄信子

如鳥壽人 掃地 奉御傳人 掃地 唐

略

唐先 寄信子

唐先 寄信子

贈從四位傳村無三死板抄

唐先 寄信子

唐先 寄信子

中書省行福園清物雖未出也... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子...

諸名

唐先 寄信子... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子...

立入

唐先 寄信子... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子... 唐先 寄信子...

結糸

四母

抗丹

三糸五世入

四糸 七世

八母

西糸 七世

土糸 九世

Handwritten notes in vertical columns, including the characters '結糸' and '四母'.

12 太立

Main body of handwritten text in vertical columns, containing various characters and symbols.

么向維林是陸軍。天兵一下太倉皇。校行才子風何
伏。老老去人驚亂狂。唯帶無印表世凱。廟裏有
根木子鶴章。十分氣運招之滅。北虜君臣在後狼。
○這言散敗事多強。國之強書奉常會。今日前
紀動已解。無人聽後不中心也。

古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

(一) 古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。
(二) 古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。
(三) 古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

古事

古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

古事

古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

古事存記多編卷書。一以正其。一以正其。一以正其。

嘉祿種以有郡之村民共無得五群騷一村也三人
 家ヲ毀し或ハ世未嘗一障礙ヲ多ク由在事以ハ外ニ御
 忍シ之儀之ヲ鎮撫ニ成ルルコトヲ先權由事ノ難
 久此必希兵士指而人年十乃福國先氣任既許在
 止右且予ノ在代ハ以出之無慮方強久者改鎮撫
 輕ク又此守福國方任既許ノ事ヲ譯シテ有ク其由
 以支取自奉年ノ已同名持取之故也
 此由之ヲ以テ
 福國方任既許之由也
 第十右邊毛山田子也

此由之ヲ以テ
 福國方任既許之由也
 第十右邊毛山田子也
 嘉祿種以有郡之村民共無得五群騷一村也三人
 家ヲ毀し或ハ世未嘗一障礙ヲ多ク由在事以ハ外ニ御
 忍シ之儀之ヲ鎮撫ニ成ルルコトヲ先權由事ノ難
 久此必希兵士指而人年十乃福國先氣任既許在
 止右且予ノ在代ハ以出之無慮方強久者改鎮撫
 輕ク又此守福國方任既許ノ事ヲ譯シテ有ク其由
 以支取自奉年ノ已同名持取之故也
 此由之ヲ以テ
 福國方任既許之由也
 第十右邊毛山田子也

三十二回忌辰、依見人追慕儼然、是朝表于寺田横趾、待命又
于余、余遂過平治子等院。市原之位故跡、所留扇芝者、依御
不能去、黃壽永中予以專橫。賴朝義仲等舉兵、討伐之、
而九烈士事又相類焉。故余撰其大書、表其功烈。與扇芝
並傳美于載。後人過此、亦必有他御不能去者矣。

正四位勳四等初孫議負之學博士 川田剛

新撰 札長 一冊 抄本 記 地 後 又 撰 抄 本 教
所 贈 抄 本 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教
可 多 抄 本 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教
一封朝奏九重天、夕貶潮州路、欲為聖明除弊事、

前守、
閣馬、
知、
海、
遠、
泉、
德、
意、
好、
水、
清、
江、
流、
不、
斷、

馬水方人のたのしみはあしめい

。 抄 本 一 冊 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教

。 抄 本 一 冊 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教

。 抄 本 一 冊 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教
。 抄 本 一 冊 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教
。 抄 本 一 冊 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教
。 抄 本 一 冊 長 卷 寫 本 記 地 後 又 撰 抄 本 教

甲子正月 將軍 臣 奉 義 上 殿 上 奉 勅
全 西 三 卷 内

九月 二 日 奉 勅 氣 味 神 祇

奉 美 八 月 十 七 日 奉 勅 中 山 古 山 八 日

全 十 月 奉 勅 將軍 上 殿 奉 勅 奉 勅

十一月 十四 日 奉 勅 奉 勅

奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

將軍 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

全 十 月 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

西 性 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

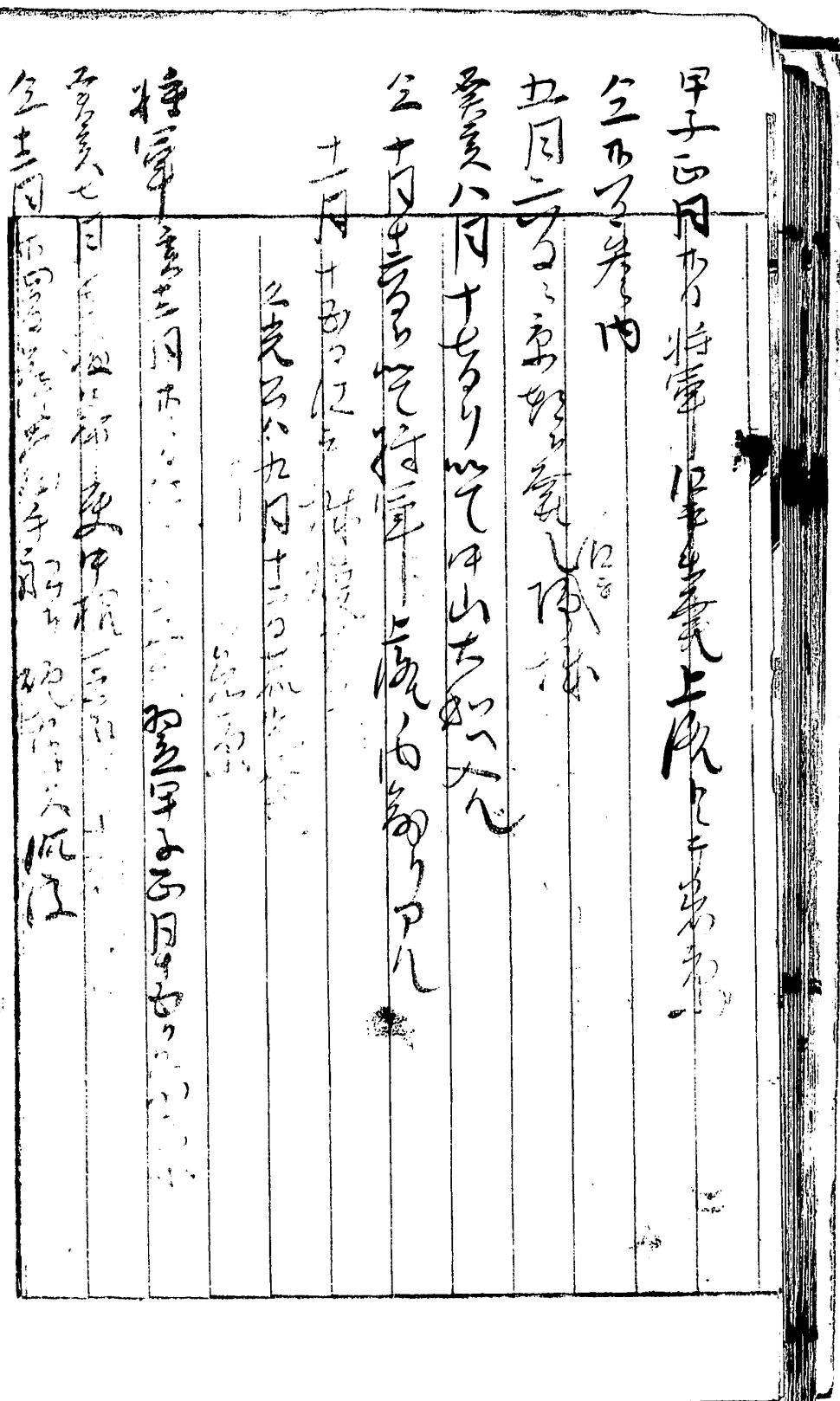
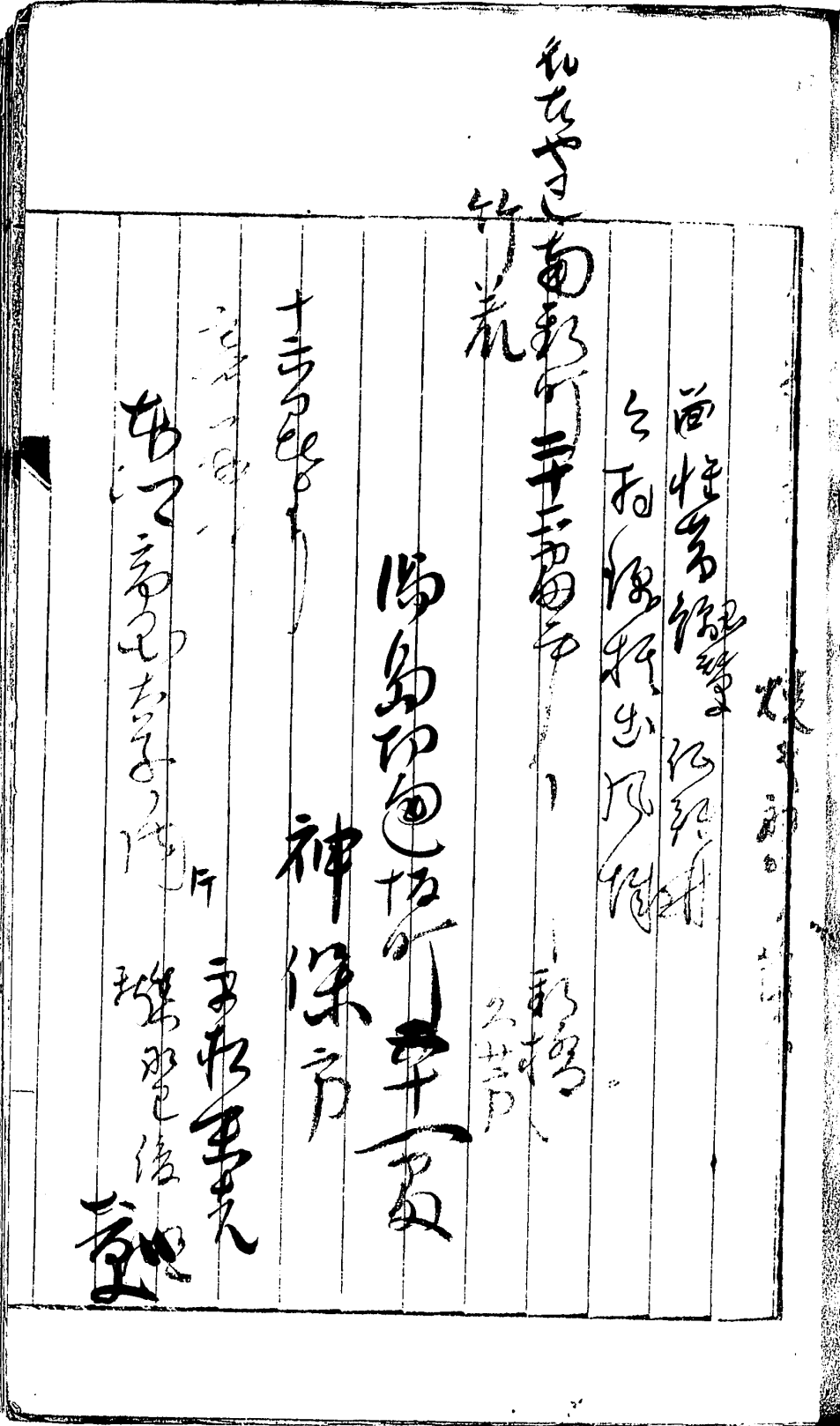
奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅
奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅

奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅 奉 勅



田村 近來結集七代新中隊 職
第十一任集院 源兵衛

加力
十前前

三河國 三河郡 新坂 新坂 新坂
三河國 三河郡 新坂 新坂 新坂
三河國 三河郡 新坂 新坂 新坂

中山 中山 中山

中山 中山 中山

寺富 寺富 寺富
入 入 入
川 川 川

没

欲同即何事、雪山無窮、唯恐苦難雪、為即
減行強、
欲後強強、所思之、新物新、月、
重為風、

巴山

帝物 帝物 帝物
帝物 帝物 帝物
帝物 帝物 帝物

花 花 花

高 高 高
高 高 高
高 高 高

何 何 何

堂上玉音詠、行向雲邊前、劍戟爪氣滿、船艦
鐵不堅、和戎多苦言、一箇戰中德三、高連板以東
元、深泉脚凱旋、

鳳瀆駒勢執軍衣

玉指 出音調

三枚凸現

白播翅血弱體病

子裁樂毛仔油陽

福臨王

福臨

出音調

秋苑...

往回...

...

...

...

誼一書載、女子、...
...

已聞子懷院
又指法師捷

崇報
信二報
無系穴行
信侯校播
急激 澤界

山河面目立年化
大轟縣在朝出國
鐵爪皇離
依田學
兵隊
依田學
山河向膜
長辯

為色家
平特
兵
王
東
給
大
十

川原

安指

二 勅使位 菅原道隆 乳母の監觸

三 階級 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

中 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

(三)

大音 兵部 百子 傳

甲子 乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

三十一 乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

七月 乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

附原

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

十月 乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

十月

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

乙酉 丙辰 丁未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑

三曰... 四曰...

林... 辭... 君...

尹... 渠...

通... 大... 山... 海...

何... 紅... 得... 老... 叙... 瑞... 巨... 昭...

何物... 紅... 得... 老... 叙... 瑞... 巨... 昭...

何物... 紅... 得... 老... 叙... 瑞... 巨... 昭...

何物... 紅... 得... 老... 叙... 瑞... 巨... 昭...

新撰又或年勢如神、肉亦思欲為協力不為、
甲鐵筆及思勢堅、水雷亦海高前、
必能百層、花葉、
此處云、
何隔將

豊三石

多澤

凡雲叱咤、
扇前列、
先、
此の

先鋒、
此の

今を後況如、
自、
御、
有、
去

海

ね、
千、
二、
ま

平橋三原

中島弘精館

待乳(名)

○古田島平島氏之遺事其後現況印證傳用

此書の記述は... 古田島平島氏... 遺事... 其後現況印證傳用... 中島弘精館... 待乳(名)...

流暢... 古田島平島氏... 遺事... 其後現況印證傳用... 中島弘精館... 待乳(名)...

寄懐錦山槐... 玉斧征... 天園... 尾斗西南... 海女... 素問... 不眠... 金拆... 東屋...

石田海 石川三 七家日記 柳村 中村 宛
西子孫 永島直し 去りたる 久保山 一市上 海人

七月 海り 尾江 海 中 森 勲 七 幸 野 中 宛
石田 宛 中 村 宛 久 島 七

八月 宛 柳 村 宛 石 川 宛 久 島 七

八月 宛 柳 村 宛 石 川 宛 久 島 七

我々 柳村 宛 石川 宛 久島 七
八月 宛 柳村 宛 石川 宛 久島 七

柳 宛 石川 宛 久島 七
大 仕 柳 村 宛 石川 宛 久島 七

哀さそゆ不愛愛の秋の月	遠連
痛せしつゝ最の笑の予	之小
輪違ふあぢちこぢちよ厚く	其子
栲樹の糸も髪ぬかりまじ	毛内
我思ふやうしものなぢぢぢ人	思接
かへてささるるに昔うあぢぢぢ	竹安
われたあしは髪をなまぬけぬ	何年
さし接しつゝ髪を待たぬ	何年
最初から流るゝ髪は髪を	何年
凡のゆゑに髪は髪を	久留
未るよも髪は髪を	久留
髪をれ行てその髪は	若き

るり忠仲乃北高世をひせり	七せあり
市からり髪を髪は髪は	之ハ
子せる髪は髪は	わび
髪は髪は髪は	日高
親のため髪は北高世からり	黒大
市田は髪は髪は	えん
いたる髪は髪は	髪は
えぬ髪は髪は	衣
市田の親は髪は	あま
髪は髪は髪は	髪は
此下は髪は髪は	髪は
何んが髪は髪は	髪は

新田北ましのてあれたまを

是大

鶴さうちりりしたる物丸

杉野

秋月みこつ橋のまを

子丸

ルハ一ははらみちの孫子

高子

はな草一又まゆみ人野山

野丸

己よひるのふね世世

野丸

大木のちのくまの物持ひ物

老

あまのつねもま

あ

十月四日

一甲老回船りてはたす 一太組別後行はる

一せきおのり割腹中(中)おるはる

一はな草(一)おる

念二十三日

一雙心若野梅後ま階海 一柿田お新丸

一倉所は中(中)おる

一田老(中)おる 柿田お新丸

○おれ以下お行はるおる 柿田お新丸

念五日

念五日

一甲老 一太組別後行はる

四

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二

二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十

雨は陸奥を情 春風岬のあはれは 心と云ふ雲
張、舟楫等重花影行

おと来たる梅屋はよきり人よ
吾北花よりらんわんわん

大森の輝と祈る本陣て 藤巻 九月風色のやハと我を恨
す、祈り多き旅人の首領の心もあつて 龍は平 左様だしはめ
を、旅、活の行ひ自由におもひあふしめ旅人とあはれおの
り、如しき

物部士三年のあつた

於敵大森の支那き祈、平本川社院のほは風風のおはれ

防衛の志はつた成徳の心 藤巻 九月風色のやハと我を恨
す、祈り多き旅人の首領の心もあつて 龍は平 左様だしはめ
を、旅、活の行ひ自由におもひあふしめ旅人とあはれおの
り、如しき
何ぞしと白濁の成者は情と祈り、平本川社院のほは風風のおはれ
藤巻せん 旅のあつた 九月風色のやハと我を恨
す、祈り多き旅人の首領の心もあつて 龍は平 左様だしはめ
を、旅、活の行ひ自由におもひあふしめ旅人とあはれおの
り、如しき
物部士三年のあつた
吾北花よりらんわんわん

一 十月二十一日 午前 牛時 西 四度 考す
 一 午後 支那 支社 後 考す
 一 午後 支社 支社 後 考す
 一 午後 支社 支社 後 考す
 一 午後 支社 支社 後 考す
 一 午後 支社 支社 後 考す

一 午後 支社 支社 後 考す
 一 午後 支社 支社 後 考す
 一 午後 支社 支社 後 考す

午後 七時 支社 考す
 午後 七時 支社 考す
 午後 七時 支社 考す

十月 支社 支社 後 考す
 十月 支社 支社 後 考す
 十月 支社 支社 後 考す

神武直躬之墓

君直躬此神武直躬又謚藏丹神武氏以明其

三月廿九日生於福屋郡宇美村君後世故林從順有特

所更所傳神武直躬而見神武直躬之墓於福屋郡宇美

國直躬之墓 經傳傳復又 於此全記

以類敘貝絲梓大標壇品行方正之君子也

清定後之宮故牧高道之德也 經傳傳復又 於此全記

而東上之業於慶應我起社之社會經商之

一十七年四月廿九日病卒 具於亥下 時年七十有三

弟與君瑞午而共神武直躬之墓於福屋郡宇美

此於本郡之墓而抑其國康永其墓數者而哀願而未敢

有為君贈墓額 經傳傳復又 於此全記

慨歸云

經傳傳復又 於此全記

千秋事業之大業 於此全記

知人之名也 於此全記

年卒於其國 於此全記

後 載其墓於其國 於此全記

能多取固古并其墳 於此全記

五、陽春山ノ南東ニ

二四

十子十子ニ起上ルルカニ高ニカケ申ス
遊歩行見ニ初也也内カニ高ニナリシニ

傳音障以法之動原此入

青凡

開

初為 宋年高 新雪

曉霞則

高田喜馬路村

九月十日 夜抄

高田喜馬路村

十年二月

高田喜馬路村

井倉介中

阿部良平

七色の巻

葛由

標兵依

正田

高山

融通

野口新右衛門

今見新田

臨川甘之

甲子中儿人 伍品 正色 建子文昭为 并侯 孙心
 膳多寺 / 先锋行 二天派十小 夏秋之像 大田
 才色 津西寺堂交什 御殿

五原 三三三 卷之八 人 孙心 子
 梅田雨云侯侯 梅田雨云侯侯 梅田雨云侯侯
 梅田雨云侯侯 梅田雨云侯侯 梅田雨云侯侯

月下新律云以 朝久 同侯侯
 侯同子云 十小用 同侯侯 力名可 力名可 力名可

十至歌 一山 陽 不 故 寺 入 遊 二
 北京 佛 高 山 天 八 高 山 佛 院 不 八 比 寺 一 山 天
 鴻 卷 大 五 術 校 想 三 山 天 八 高 山 佛 院 不 八 比 寺 一 山 天
 報 四 山 天 八 高 山 佛 院 不 八 比 寺 一 山 天
 汝 能 道 三 山 天 八 高 山 佛 院 不 八 比 寺 一 山 天
 力 日 向 自 家 寺 堂 力 日 向 自 家 寺 堂
 相 寺 力 日 向 自 家 寺 堂

難做ハ一ト一トあるもの。自のたゞし知りあつては未練
な已たしが世相の勝負の叶はずとし。仲裁こそと希望
して。法螺まき習はせ給せ給。あぬの思ひのいふらあぬ
日本人が此處を攻めしは平一ト一トいかならん。ゆけては
動海清心。いしやあぬのあつてはあつて。えらみ強とは
高籠も。満和をたのむ。臆病心。たしやあつてはあつて。

三田四馬廻 新録也
芝之芝之芝之 攻玉社 (麻子下)

西便信子校 芝之芝之 芝之芝之
芝之芝之 芝之芝之 芝之芝之

工年学校 (芝之芝之)

寺子校 物理子校 麻子校 芝之芝之

芝之芝之 芝之芝之 芝之芝之

芝之芝之 芝之芝之 芝之芝之

芝之芝之 芝之芝之 芝之芝之

芝之芝之

芝之芝之 芝之芝之 芝之芝之

多也寺也

新張敷於此

児玉一健

金子留書院

あつ陽保如

反也檀

多陽良三郎

長良久定

神部良吉

水川町草野

金山高志

又川三郎

梅原三郎

世伯三郎

山内三郎

福子三郎

村富三郎

馬木三郎

因 三六

日向三郎

あつ陽保如

金子留書院

あつ陽保如

生島新也

内海長三郎

山内三郎

山内三郎

住川三郎

大熊三郎

藤田三郎

高橋三郎

多那三郎

松浦三郎

中尾三郎

山内三郎

山内三郎

ものことばらふきとふに書に侍るとの事思ふらふ
とていふ事なれどいふ事なれどいふ事なれど
more of the same nature as the
陽に照らす事なれどいふ事なれど
あせむ事なれどいふ事なれど
なほおもふ事なれどいふ事なれど

伊勢のあまのなみのなみ

初めあまのなみのなみのなみ

衆を無信に説く度

又無信に説く度

法に無信に説く度

体道無上唯言教

受てて復説

我に三等の弟子あり。亦信極なり。一は諸縁を放棄し。專に
爾に説く。大に明なる。二は信に成る。三は信に成る。四は信に成る。
我に三等の弟子あり。亦信極なり。一は諸縁を放棄し。專に
爾に説く。大に明なる。二は信に成る。三は信に成る。四は信に成る。
我に三等の弟子あり。亦信極なり。一は諸縁を放棄し。專に
爾に説く。大に明なる。二は信に成る。三は信に成る。四は信に成る。
我に三等の弟子あり。亦信極なり。一は諸縁を放棄し。專に
爾に説く。大に明なる。二は信に成る。三は信に成る。四は信に成る。
我に三等の弟子あり。亦信極なり。一は諸縁を放棄し。專に
爾に説く。大に明なる。二は信に成る。三は信に成る。四は信に成る。

此等の出上り。其の御事。のまに御入。のまに果。既。
直。まのま。老。幼。の。後。を。ま。す。の。御。事。の。御。事。
老。を。久。く。の。唯。の。御。事。を。御。事。の。御。事。の。御。事。
御。事。の。御。事。の。御。事。の。御。事。の。御。事。の。御。事。

御事
御事
御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

御事

法系及僧徒何人爲子即高僧
高僧和欣德高僧壽遠西苑能子能解
便君教如以爲口輕便中三喜

世爲人保世何言自來壽遠師
既終其業以是花也何能爲
了了多事集印法際能壽遠師
新花とを重以厚近中
法系及僧徒何人爲子即高僧
高僧和欣德高僧壽遠西苑能子能解
便君教如以爲口輕便中三喜

早川崎の離途
春早川崎の離途
跡跡し到は如く清を捲起し
又とてを遊後し山曠多し
國の星乃る難法をい
指さす
はる三日平泉
おん始めし
法進

此年三月十七日
...

三月十七日

白雲

...

...

...

三月十七日

...

...

...

...

...

三十一 象

三十二 象

三十三 象

三十四 象

三十五 象

三十六 象

三十七 象

三十八 象

三十九 象

四十 象

合三十一至四十九

三十一

氣性奇在根 補德德德 德十色則 之長馬 由德名 氣性奇在根

世世清名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名

為心巨步 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名

何事 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名

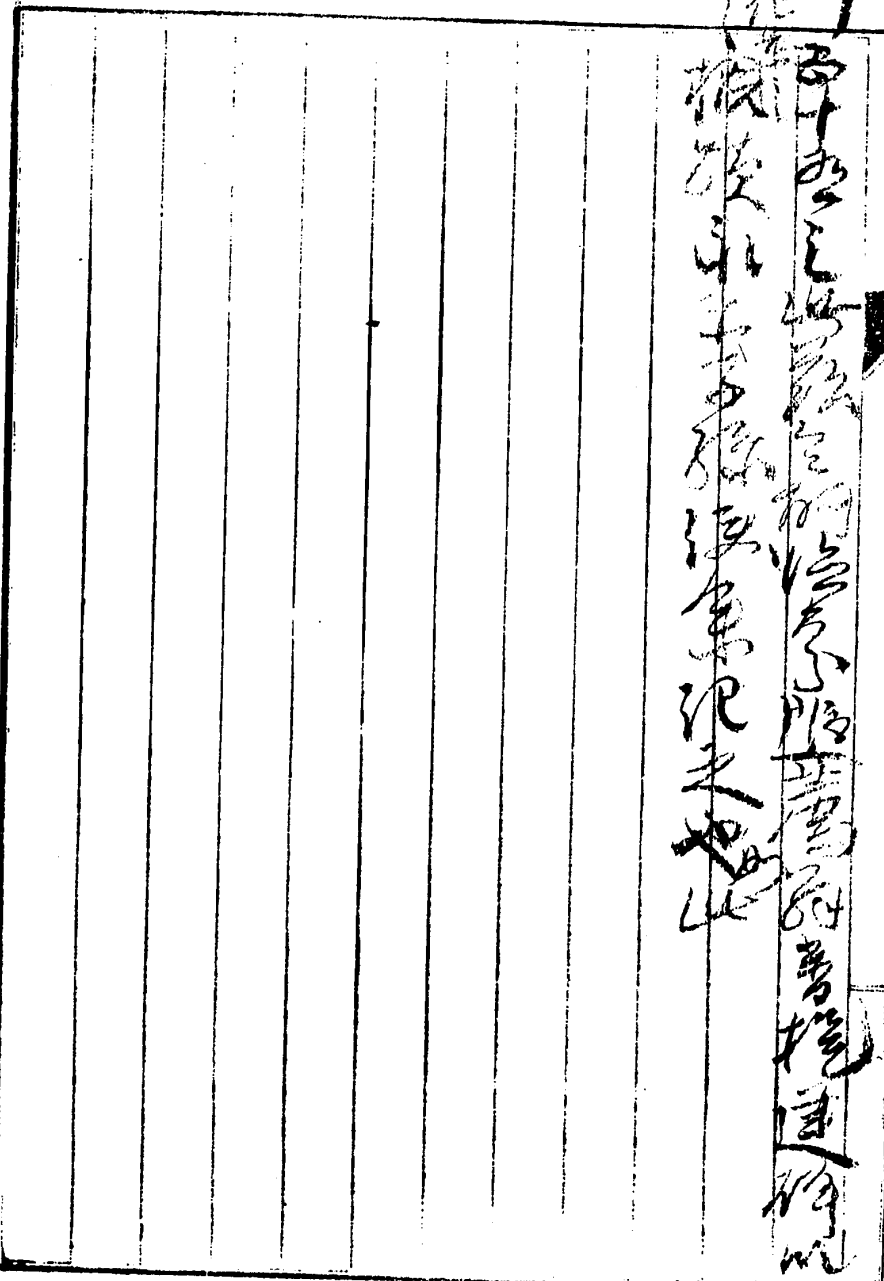
手之 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名

投以 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名

善送 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名

德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名 德名

行年
初年
...



表碑銘

大德院 名譽良義居士

大姉

表碑文

翁姓大川精種英幼名善太郎長福徳右衛門徳十
種則平來林精屋部木爰比村簿善六三女政子の
以弘化四年丁未十二月十九日... 家世居...
之開設... 乃性家于傳車場側新築之營...
乃屋... 乃村... 乃市右衛門三女貞子生五男一女

徳方既... 英... 徳... 英... 徳... 英...
 勳... 徳... 英... 徳... 英... 徳... 英...
 通... 徳... 英... 徳... 英... 徳... 英...
 下... 徳... 英... 徳... 英... 徳... 英...
 事... 徳... 英... 徳... 英... 徳... 英...
 公... 徳... 英... 徳... 英... 徳... 英...

緒言

本編ハ我ハ... 故從二位勳三等黒田長博公...
 下之一世に係る系譜なりとす謹而惟るに嘉永癸丑米國...
 使船來航... 天下之時態ハ著く變遷... 隨公...
 武之錯亂開鎖之紛糾... 運方り公ハ炯眼...
 事に通曉し... 時勢の嚮ふ所を看破し早く海外諸國之...
 兵制其他格物開智之技術を博習し當時の幕府を補佐し...
 て其匪政を匡濟し激浪を凌ぎ故霧を攘ひ以て今日文物...
 典章善美なる政治の途に於て指南の軌道を啓發せられ...
 たり語曰下和三獻未免遭刑夜光投人鮮不按斂... 嗚呼...
 公ハ英明聰慧尚武豪毅之資性を以て世昏睡を驚覺し時...

の暗蒙を打破し、以て文明の域に誘導せんとせられしや、
幾多の障路も無涯の罅礙に迫り来りて公の進路を圍繞
せり壅塞せしを見るも、何ぞ怪むに足らんや、然れ共其餘響
ハ端なく遂に惨毒劇烈なる彼の朋黨の軋轢内訌を惹起
し為めに公を以て畢生の心膽を爰に粉砕せしめたりき、
然れ共這ハ此れ率先啓行者の免る可からざる所たり、公
ハ斯る非常の難關に處し、其豪膽雄略ハ益す堅固にし
て、當時紛訌の奇禍を未だに救ひ、克く之を綏安して以て
社稷を泰山之安に復し、巨鑊一定堂々たる大家の福祚謀
々今日あるを致されたり、此際に介してや公ハ愛國忠君
の深さ、或ハ朝幕への建議となり、或ハ長藩の救解となり
或ハ五卿の迎送となり、或ハ征長の軍旅とふり、或ハ關東

奥羽の出兵とふり、遂に維新の創業に嚮ひ、公の遠略宏圖
ハ一沈一浮、遂に明治之政を創設し、以て大に煥發せし
に及び、其功蹟と其時状ハ、即ち本編に於て僅に其仲中
の二三を蒐輯し、其一斑を表彰せし處あり、又曰、蓋世必有
非常之人、然後有非常之事、有非常之事、然後有非常之功、夫
非常者固常人之所異也、故非常之原、黎民懼焉、及臻厥成、天
下泰平、解蜀父とハ、それ公の謂哉、嗚呼、公ハ非常之資材を
抱き、世論の危険を冒して、以て非常の事を為し、毫も躊躇
せるを見ず、世上の厄難ハ、爲りに臻りて益々公の宏圖を
以て其堅牢を促し、大方の誹謗ハ、頻りに凌ひて愈々公の
偉業を以て光輝を發せしなり、然れ共天下具眼者の少き
或ハ公を批議して曰く、公の乙丑内訌を料理し、正士を誅

鋤せられしハ或ハ其徳に於て慙る所なきを得んや公の
幕府を翼戴して始終偷らさりしハ或ハ其行に於て疚き
所なきを得んや吁々是れ成敗の跡に依て其事を論す世
の皮相論者の常套の言んをそれ非凡英傑の心膽を闢
ふことを得んや茂逸ハ將に公の功蹟と當時の杖態を證
明して斯る輕薄論者を警覺し恁る徒霧を掃蕩し以て公
の明德を千古に表彰せんとするの己むを得ざるなり取
らざる
公請ふ之を論疏する所あるべし
抑も公の乙丑之内訌を處斷せられしを論せんと欲せハ
先づ彼兩黨なるもの性質より之を論究せざる可から
ず彼の勤王黨なるものハ如何彼の佐幕派なるものハ如
何其時勢に依り各其執る所の方針に於てハ素より異同

漫

あるも均しく此れ一藩の社稷を保全して以て公を補佐
せんと欲す取らざるのなり唯其途に於て過激と遲緩の兩
道ありのなきも夫れ鏖石相撃て石火を生ず況んや兩
黨各主義とする所あり衝突し相軋轉するの餘ハ血を
見以て以て止むに至るハ騎虎の勢ハ制をハかりざる也
のありなり公の斯然彼の過激輩を誅鋤して兩黨決鬪燃
眉の奇禍を其未幾に匡救せられしハ稍や故あるなり彼
等の主義とする所ハ如何幕政を倒し王政を復する以て
梅據とす其事ハ即ち善し而して彼等の行状ハ如何ん臂
を張り目瞋らせ隻手を揮ふて攘夷を試んとし甚しきに
至りてハ或ハ謾に人を暗殺し或ハ狴獄を破り罪囚を脱
し國法を犯し藩則を破りて恬として顧らざる所ありし

然れ共其舉動の野鄙期なるは無謀新謀夷新或ハ怒をへし唯
其國法新悖戾新をるに至りてハ一其罪新假新を可新
らざるなり且や彼等ハ舉動ハ忽ち其反對黨新を以て口を
藉新其罪を指搦せられ新彼等ハ自から取りし所なり
謂新可新ならん夫れ國法之權ハ一日も其國を去る可
からざるなり公ハ断然誅戮して假さばりしハ即ち其國
憲を維持し以て治國の重典を立る所にして所謂涙を揮
ふて馬稷を斬りしものなりと断言して憚からざるなり
又た彼の仇幕派の舉動ハ如何新既新也新異黨を猖獗新
搆し之れに誣るに國憲犯を以て之を新斃新せり且つ彼等ハ
同列比周して公に要し此事を決行せしめりにも拘らず
敢て公を以て其處置後に於て一藩士民へ親諭の勞を煩

はじめたり彼等ハ主君を要し其處置を為さしめ却て其
責を遁れしハ豈にそれ不臣の甚しきものなりと新名言を
るを憚新からし何をや彼等ハ政府の権柄を掌握して斯る
一大難件の處置を促しなからし事々物々公の親裁なり
公の趣旨ありと新言新して其罪を遁れ他日の禍を主君ハ
嫁せ新ゆ新んとす事爰に至り彼等ハ職新責新何新に不
在る彼等ハ補佐の責新那邊新に存せしそ然れ共此等の事
ハ或ハ怒をへし彼等ハ其善後策を誤り社稷の浮沈に係
る一大藩難を主君ハ歸新せ新し其罪ハ決して遁る可からざ
るなり何をや

抑も幕府ハ征長の軍を發せざるや公ハ當時尾張総督に説
きて其解兵を促し邦内干戈を交るの禍を解き國家の危急

を狩類に匡濟せられたり且つ之れに踵き五卿を封内
相迎へ併せて薩長兩藩執隔の調停を試みられしハ此れ
公の本慮の在る所に於て眞に公一世宏圖の淵源なりと
す然るに彼等ハ嘗に補佐して以て其大成を畫せざるの
にならず天下の時勢ハ著しく變遷し暗々裏に於て公の
曾て善緒せられし彼の薩長聯合の機は熟せんとするに
拘らず當時再征長之幕軍ハ振はざるにも拘らず彼等
異黨を忌悪せるの餘波ハ異黨ハ曾て公の深慮を奉し
て善緒せし事業ハ玉石混淆一切排斥して顧慮する所な
く一意幕吏ハ虚喝を畏怖して事を處し刺え幕吏小林甚
六郎を迎へて五卿を引渡し浴外謹慎を旨として其事を
爲んとせり此れ彼等ハ識見暗陋にして時勢を洞見し一

藩遠大の計籌を運ぶ能はざるに出て一と雖も此等の事
件ハ他日一大難件と變んし來りて以て再度公の心慮を
分裂せしめしにあらすや事爰に至り彼等にして若し士
氣と廉耻ハ心ありぬハ彼等ハ公の處宰を待たずし
て以て自から決まる所あるべきなり彼等ハ果して
るものそ又た公をして其處置を煩わしめたり何そ其の
公の名譽を毀損し公の心慮を煩悶せしむる甚しき一
に至りしそ嗚呼乙丑の内訌ハ豈それ公の一世係り一
大難事と言ふ可からず夫れ洛國の至難なる其状の
悲惨にして其禍の烈なる朋黨の紛擾より甚しきもの
なし公當時若し其處置上一歩を謬るあらんか兩黨悉く
倒れて以て止むにあらんハ決して戢らざるハし實に

一藩浮沈の危機一髪を容れざりしは、公ハ断然忍んで之れハ處置を施されしハ、真に公の英邁豪宕なる氣畧の本領とするなり。茂逸ハ進んで公ハ佐幕論を執り始終偷らざりし所以を論究せんと欲するなり。

夫北嘉永癸丑に方り米國使ハ來航して通商條約を求むるや、當時幕府ハ諸侯に命令して其答議を需む、當時諸侯の答議ハ如何ん、**國**據夷論にあらざれば則ち務めて彼北に確答の期限を遷延し、以て邦内の武備を固るへしとの皮相論に過ぎざりしと、公ハ断乎として開國の議を執り、毫も憚る所なく、數個條の讜議を建てられたり、此北公の能く海外の事事に通諳し、開國通商の利益を洞見せられたるにあらざるよりハ、笑を能く爰に及んや、即ち其建議ハ

言々公の滿胸愛國忠君の熱情より瀝出せし所に、殊に國民一般の商賈船へ蒸氣船の購入を許可すること、我邦より進んで使節を海外諸國へ派遣すること等の如きハ、數年を出てす、以て今日に實行せられたるにありすや、之を要するに、公ハ當時開國論の冠冕と仰かれ、率先と認められ、見る處止る處、彼れの據夷論者ハ舉動を忌み如何なる國難を醸成せんことを憂慮せられたるなり、且や當時幕府ハ時変に接する、優柔不斷に失し、稗政稗政からざりしハ、彼の伏見一擧を除き其以前に於てハ、始終朝旨を遵奉し、祖宗以來朝家より負ふたる大權を以て辨令す、公ハ上朝廷を戴き、下幕府を佐け、堂々たる正路に就き、馳驅に範して、以て尊攘の大路へ嚮はれしなり、彼の討幕の如き彼の

隻手攘夷の如きハ公の本領より之を視水ハ誤過をなす
なり推道を踏むるのたり即ち當時の幕令ハ即ち朝旨に
して朝旨ハ即ち幕令なり之を遵奉するこそ正統の勤王
と謂はざる可なり此際幕府ハ奉勅辰翰を降し
て以て國是の在る處を示す世の過激黨のみに於てハ或
ハ之を及覆の論旨として幕吏ハ模倣に成りしものとし
敢て之を批議するものなきを得ざりしや這ハ是れ大議
論にして我々臣民の敢て論辨すべきものにハありさる
なり既に聖詔とある以上ハ宜しく之を奉戴して以て其
方針を決し其政を施し其業を営むべき此れ國民の本分
にありすや公の聖詔を奉戴して當時の幕府を補翼し藩
屏の任を盡されしハ即ち公の公たる所以たり然れ共時

運變遷し機軸旋顛せんとするに及んてや滄桑雜庶詭過
耳為きける可からず推道も顛さるべからざるなり此等
時勢の嚮ふ所を熟察して以て活機の策畧を施し以て藩
主を補翼し社稷の安寧を維持せしむる執政職の責任
にありすや抑も徳川將軍親登して再度長藩の處置を為
んとするや天顏に咫尺して天意を奉伺し優詔之れに降
りて以て之を重んず公ハ之を以て後來天幕に横りたる
執隔睽離を一掃し公武真成和合整ぬしものと信し大本
を爰に決して以て諸政を指揮せらる然り而して真の朝
意ハ翻りて薩長諸藩の讒議に依りて其實を奏したり他
日公を以て真の和合と認定せし幕府の虚喝に出しこ
とを發見し其不明を謝して彼等の擁蔽の罪を正されし

ハ茂逸ハ筆を投して難泣し憤慨の涙流下るるを覺嘆さ
りし何ぞや此れ決して公の不明にありす彼等ハ公の其
職を盡す能ハざるの汚敗の意々彼等ハ職を分ちな
かも時勢に疎公の曾て著録せられし彼の五卿を迎ひ
て勤王の本意を表し薩長を聯合して國是の本領を築か
れし其機運の熟成するを知らずして腐敗臭體せし幕
政に戀々し以て脆くも藩の方途を誤りたり事爰に至り
彼等ハ果して何の詞かある彼等ハ實に公の罪人にして
一番の蝨賊なりと謂べきの鳴呼公の慧眼ハ世俗の朦
霧未々霽れず刺殺排抗交々至りし時代に於て西洋の政
理風俗學術技藝諸種百般の事業を傳習し富國強兵の進
路に於て先導誘掖せられしハ豈公の千古冠絶せし卓識

宏畧の汚致にあらすして何を必

公の率先して以て西洋の醫學を勸奨し殊に彼の牛痘の
如き彼の衛生に關せる諸般の改良を圖られし如きは是
れ公の仁なりと謂ふべし。

公の長藩ハ一時之冤枉に罹り嚴謹を蒙むるを傷むや實
に薩叛肥三藩聯合して以て上京周旋あり其征長の軍に
際してや上朝幕に對し干戈を邦内ハ動かすの不利を建
議し下長藩ハ接し恭順謹慎して其命を待つべきを勸告
し且つ五卿を封内ハ迎へて以て復官歸洛の周旋を試み
られハ是れ公の義なり。

公ハ當時幕政ハ萎靡し日ハ西なるを歎き飽迄其匪政矯
正し之を補翼し朝家を尊崇し海外之交通を開き以て國

是を無窮に確定するの目途を貫かざる。故に公は彼の無謀攘夷の國家の前途に不利なるを知り、正明正大なる大略を踏み、陰險術策の危道を避け、藩屏之任を重んじ、幕府と進退を共にせり。此ハ是れ公の禮なり。

公の曾て其實家薩州藩之内訖を調停せり。此ハ、問老阿部勢州及知音伊達遠州へ内牒し、當時之幕威を假用して之を鎮静し、縫嗣其宜を得、激昂に戢り、一番を以て血雨腥風の慘毒を免か。此ハ、又た彼の西南騷擾に遭遇し、公ハ其老躰を以て厭はず、柳原勅使を奉護し、遠く鹿見島表へ赴き、勅旨を公の親族久光君へ致し、臣子の名分を正し、島津家之名譽を保持せり。此ハ、是れ公の智なり。公の薩藩通士の來奔を保庇せり。此ハ、當時薩藩之追躡

酷々嚴密なりしに拘り、公ハ侍臣に命じて其通士を台所（せうしよ）に潜匿（ひそめ）し、踪跡（しゆくせき）を殺せしめ、又々今藩ハ嚴敷く相迫りて其人柄の引渡を要求せり。公の一諾ハ恰も磐石より重く、飽まで抗辯して其需を命（めい）け、多年封内に保護して以て其危難を避し、其窮困を恤（あは）ひ、事平（ことな）後即ち帰參し、其志を遂けしめられ。此ハ、是れ公の信なり。

嗚呼公之事業ハ世之變遷に遭遇して、一低一昂、艱厄當なり。さりし。公の徳性ハ五十年一日の如く、磨せず涅ます。以て世に顯章（けんしょう）たり。又た公ハ夙に西洋學術之精密にして、實用に適切なるを愛し、以て一藩之學風を革新し、有用之人物を培養して、以漸次全國へ普及せんことを圖らる。や爰に年あり、既に脩猷館を再興して、以實用の學科を

講習し其俊秀生へハ多^抄少の學資を貸賞して其志を遂け
しめ今猶斐々として成材絶せきりし又た公の撰拔及眷
顧によりて西洋諸國へ遊學し宿圖を果し其學術技藝を
修熟して歸朝せし國家有用之人物ハ幾多なるを知らさ
りし此れ豈に公の慈惠の恩澤にあらすや公ハ又ハ令孫
長成君を鍾愛せられ其教育陶^董の周到なる蓋し公の天
縱に出たり長成君之聰明^俊なる克く公の心を以て
心とし夙に諸學科を研修せられしものならず實に英國
留學多年堂雪の下學士の榮名を佩ひて歸朝せられ遂に
今日頭職に上り公の遺緒を大成して國家の樞機を參畫
し益々家聲を中外に發揮せらる此れ豈に公の愛育之美
果にあらすや

嗚呼公ハ既に五常の徳行を布き之れに重ぬるに慈愛之
美を以てす公の非常事業ハ世の艱難を経て隣せず縮せ
ず益す其光輝を生ず厥孫謀を貽して以て子孫を燕翼し
厥嘉猷を遺して以て邦家を補弼す開國文明之域に率先
して以て明治の鴻業を基礎す宜る哉我ハ先文先武なる
天皇陛下ハ公の館郎臨幸し給ひ以て優旨を賜りしこ
とを明治旭日の勳章ハ公の胸間に懸りて以て其光輝を
添へしことを朝野の士衆ハ普く開國文明の冠冕と仰^其慕
しことを七拾余萬の舊領民ハ永く父母と慕りて以て景
像せしを識るへし公の積善の餘慶爰に及ひしを即^其
ち公の世譜ハ我黒田家の寶鑑にして而して國家の謨典
と謂ふべきあり舊臣茂逸身賤者自から掃らす敢て之を

大成して以て其復命を遂げんとするの榮を荷ふや。又其
借越を顧みず爰に教言を叙するや斯の如し。

明治二十九年七月七日

舊臣 江島茂逸

舊百原拜謹白

例言

一公の薨去せらるゝや我黒田家ハ公の遺言に基き公の
言行録を編纂して以て永く其家に傳られんとす依て
武谷棕亭医侍滝田懋吉医侍ハ多年公に親侍し當時公ハ長
崎警備巡視に隨行し且つ公の西洋諸國の文物技術を
傳習せらるゝに臨み屢々公の命を稟け長崎へ派出し
常に其事に參涉せしを以て特に斯の二人を徵して其
言行録を編纂せしめらる。棕亭懋吉ハ多年公の殊遇
辱し公の左右に親侍せるを以て公の高恩を報酬せ
るハ此時なりとし謹て其命を奉し皆出京して始て編
輯の緒を発す此即ち明治二十一年の春にてありし于
時棕亭ハ齡既に古稀を過ると雖も頗る其記憶に富み

公の言行を知識さるや最も明晰なりし懋吉ハ又た頗る其文材に秀て且つ多年公の側に在りて事を執りしかハ能く當時の事蹟を熟知し共に協詔して之を筆記す其事たるや公の行状逸事を網羅し之に重るに嘉永癸丑以後米英諸國之開港條約事件に係り公の建議等の事に及はしたり然して當時の時勢ハ益す切迫し文久元治慶應世海の風潮ハ激騰澎湃公の畢生の心魂を碎き當時征長の軍を調解し五卿を相迎し藩訖を料理せられし事蹟に及ぶ能はず（此間前後四年を經過したり）依て更に香月恕経ハ囑託して以て之を大成せしめらる。恕経ハ宏瞻なる史材を以て其身代議士の劇職に在るにハ拘らず舊宗主家へ盡すの厚き

經ハ公務の餘隙を以て呻吟忘食爰に従ふこと又た四年に及び始て公之傳記四編を稿成す於此史書の跡裁始めて成れり依て假に之を印刷して以て大方の有志に問ひて其漏洩と誤謬を質とし又た普く其材料を蒐輯し更に之を修編して大成せんことを期す何ん中途に於て病歿す於此又た江島茂逸ハ特命して以て其遺業續きて其完全を遂けしめられハ實に明治二十七年七月にてありし爰に茂逸自から揣らす曾て舊藩史を私編して以て先哲の遺業を世に表彰せんと欲するに意あり今や敢て斯る天命を負ふに至れり依て其身（其身）の拙陋と鄙賤を顧るに違らず上公之明德を景仰し下恕経ハ遺志を承慕し拮据黽勉稿成

事^に爰に三々年の星霜を経たり、殊に舊春事蹟取調^を史^に謀^を會^を負^を松原方直西島種美の檢閱を経て、遂に漸く本編を大成して、以て復命せんと欲するに至れり之を本編編輯者の沿革とするなり。

一 第一編第二編ハ公の言行録及公の開國進取之^{事蹟}に係るものにして之を起草せしハ素と稜亭懋吉に在りと雖も之を修訂して編次せしハ恕経なりとす。依て恕経を原稿者とし、茂逸ハ當其編次を補充して完全ならしめしものたり。然るに其論評及叙事に於るハ、間々其原文を訂正増削せざるなきを得ざるものあり。此れ本編ハ恕経ハ私著にあらすして、即ち我黒田家の所命に出で、貴重なる公の^{事蹟}なれりなり。然れ共茂逸ハ之を

恕経に面議せるを得ざるも、元來恕経其業を果さす中途にして病歿せし遺緒を續き、恕経に代りて大成せんとするの志に出すれハ、恕経必す地下も瞑目をへきなり。讀者此の意を諒せよ。

- 一 第三編第四編ハ長藩之救解及五卿迎送及己丑内訌の正蹟たり。恕経ハ原稿にも之を編次せしも其重なる事蹟に關してハ、恕経歿後に至り、多少の材料を發見す、勢ひ更に之を編纂せざるべからず。然して叙事中恕経ハ語旨たるを示して之を分別せり。讀者此の意を諒せよ。
- 一 第五編ハ重臣に再証長に關せる事蹟にして、其材料ハ率ハ前項と全しく更に編次せしものに係る。
- 一 第六編ハ維新以降關東奥羽之出兵、以て公の臨終に及

ふ以て本編を以て始終完結す。

一第一編ハ元年公の行状逸事を蒐輯せしものなれハ素より公の一世内外事を網羅し其年月に拘らす叙す。依て一事に以て数年に亘るものもあるあり第二編以下に於てハ毎編毎事項年月を以て叙次す。惣して本編ハ率ハ事蹟によりて編次せしものにして編年の叙次を用ひへきにあらざるなり。

一公一世の正蹟を編年體にして叙次せしものハ別に公の畧傳として本編中の概蹟を摺集して福岡藩史と共に発表せる所あるさなり讀者此意を諒せよ

明治二十九年七月

編者 江島茂逸識

目次

第一編 公之言行

- (一) 公之氣象及學業
 - (二) 事親及臣下待遇
 - (三) 納諫
 - (四) 西洋鑿術
 - (五) 教育及勸學
 - (六) 政事々業及節儉
 - (七) 武技兵制
 - (八) 薩人之來奔
- 第二編 開港條約に係り公之建議及上京參觀
- (一) 長崎警備

- (一) 米使渡來ニ付公之建白
- (二) 米國條約
- (三) 魯英及各國との條約
- (四) 條約締結後之國情
- (五) 庚申十二月之參觀
- (六) 大藏驛より回駕
- (七) 内命を奉りて壬戌九月之參觀
- (八) 第三編上 長藩之救解
 - (一) 薩筑肥三藩聯合世子慶贊君之上京
 - (二) 慶贊君之建議
 - (三) 長州小郡宿ニ於而筑長兩藩主之會合
 - (四) 長藩救解

征長之解兵

- (五) 薩長兩藩之調停
- 第三編下 五卿之迎送
- (七) 五卿之迎送始末
- 第四編上 乙丑之獄
 - (一) 勤王佐幕兩黨軋轢之濫觴
 - (二) 黒田山城之撥黜小川讚岐浦上信濃以下續々退職し矢野相模大音因幡代りて當職し藩論一変す
 - (三) 京都詰重役大音兵部等密に二條一橋家之餘威を假り退職者浦上救馬等と通牒し陰々公之左右に讒譖を構し痛く新政府負之所論に及對す

第四編下

(四) 藩政基本公示之建議公之左右と政府負之衝突
乙丑之獄續き

圖三

(五) 大音兵部二條家之秘翰を携へ歸藩して再舉を

(六) 吉田主馬朝暮之旨を失し歸藩を命せられ大音

兵部再度上京復職す

(七) 浦上教馬等同列集合して回復を圖る

(八) 福岡之藩論顛覆す

(九) 嫌疑者之處置

(十) 處置之善後策

第五編上

再征長

(一) 再征長之幕命

寸

(二) 永井主水正廣島表へ出張し長藩之嫌疑を糾問

(三) 長藩處置之裁許

(四) 長藩專使之拘囚

第五編下 再征長之續き

(五) 藝石両道戦争概記

(六) 小倉口戦争概記

(七) 黒田美作本藩之士衆を督し出勢して遠賀郡底

井野村へ本營を張る

第六編上 明治維新

(一) 藩政之改革

(二) 關東出兵

(三) 奥羽戦争概記

第六編下 退隠後之状

- (四) 公柳原勅使を保護して鹿兒島表へ赴く
- (五) 天皇陛下御臨幸
- (六) 公之臨終

大子朝臣種文之の礼を以て

人皇太子御孫種文之の御守に當りて陸奥鎮守府將
 軍故平良門守良俊に於て相馬守門良延と企て
 己王孫孫れと一良將は極部三守の御守に當りて
 なるを以て情も朝臣に任け頼望の位に登るべき
 思ひたるに良守は良俊の御守を以て相馬守門良延と
 追討し良俊を奪ひ取り相馬守門良俊を以て
 良俊の御守を以て相馬守門良俊と稱し而して良俊
 とは良俊の御守を以て相馬守門良俊と稱し而して良俊
 海城の首として人衆を聚めて南海山陽に行て

とて... 追後の... 押て財物と掠り... 物と... 阿波... 追押... 追後の... 追後の...

追後の... 追押... 追後の... 追後の... 追後の... 追後の... 追後の... 追後の...

お流し仕立の多しむるは、

新て官軍の大勢

都とさるて、

替は二割の戦艦

向て

考して

此恒

を

行方

行方

大

財物

此は

て西

後と

鋒と

を

賊の

不

之

死はつて一粟の浮入と持てたる唐を春官梅
と評して海を舟押寄りて合戦敷置はるる春官
諸軍に先入り大己の後のまゝ呼ばれて財
中の併て入り四角八方の相當短兵急の押く
春官の機取は戦は難易とて敵に勝たぬと待
春官の手に計を生かぬとあるらるる事と
此の行方とある事ありしは唐の事なりと
由り陣からと士卒の事ありしは唐の事なり
志和の官軍は博の事ありしは唐の事なりと博
の松とありしは唐の事ありしは唐の事なり

四年昔月此の船の事とあるは唐の事なり
押寄りて官軍は唐の陣を戦はぬとあるは
唐の事なりとあるは唐の事なりとあるは
春官の事なりとあるは唐の事なりとあるは
士卒の事なりとあるは唐の事なりとあるは
折しも風さの事なりとあるは唐の事なりと
徒以下以外の事なりとあるは唐の事なりと
或は焼死或は弱死ある事なりとあるは唐
の事なりとあるは唐の事なりとあるは唐の
飛たる船の事なりとあるは唐の事なりと

あると云國の敬國極遠... なるは...
返の概申は... 其外... 其...
て捕られぬ

大目守

参議右衛門督... 又為征西將軍討之... 野
は古由陸... 大蔵春實... 海...
博多... 此友... 檣... 又曰藤原純
友及... 山陽道... 追捕使... 大蔵... 藤原...
天慶二年... 左近衛... 志大蔵春實... 追捕使長官... 武

蔵父原經基為次官右衛門尉藤原慶幸為判
官大蔵春實為主...
今昔物語

天慶二年... 討... 小野... 藤原慶幸

大蔵春實... 將... 兵... 藤原慶幸

天慶四年... 彼... 火... 府... 焼

以後... 信... 陸... 行... 慶幸... 春... 海

上... 筑前... 博多... 海... 信... 春...

五... 院

ゆえに唐書年表に此三人の事と載り

扶桑傳記、此及道討記の説に従ふのみ

大和物語、此及討平の使に大和守野好吉なりと檜

家のありしやちと書きぬつし、哀れりし時とれと賦

了ぬえ玉此神とるぬは白川の、みつとておま老い

りしとま、此の初白家集のハ老とてまゝ

又後撰集には此の白川の、とらふ所は信守の

大和藤原興安朝臣のまかりとらる所は木

へとて立高こひ信守は木とて出ておま

りし檜とるぬは我黒板友も白川の

斯て西國の兵乱靜まりて中野なる藤原唐書

は都に歸り上りん、大藏春實は今度軍功被

いに、唐書西國の書に、いふと、朝廷に、信守と道

ちられ、一、家後には春實、此時征西將軍に任、後前

肥前、是は、肥前二島と管領とあり、一、後前の

傳り、様、城とて、太宰府の要害の、古、竹、と、有、

城に置て、九、の、兵、馬、を、司、り、し、西、府、を、據、守、り、興、

業、未、の、不、慮、に、備、ら、し、と、い、ふ、

按、に、保、保、ハ、天、智、天、皇、四、年、八、日、に、築、ち、ら、れ、り、其、

後、前、國、御、守、郡、肥、前、國、基、津、郡、の、保、山、に、あ、

前太平記 天慶四年七月官軍凱陣を朝廷に功を
多し封と行のめり参差あり慶幸春宮備前
播磨守と見たり慶幸は備前守
實ハ播磨守に任じ

後醍醐 秋日陛下は春頭此時封守任じ
後醍醐天皇は秋八月好古帰京春宮備前大宰赤
邊守任肥前守春宮之胤行院前慶幸之
旨萬能前國田國之宮家也

南 春宮は太宰守の誓衛とて長久保前入
あり者あり妻を家法とてあり 實國は播磨守に任じ

城の慶百あつてこの新の館とあり

之のありては戦を春宮は春宮とに任じ

あれは名采也を配有と郡守の主とあり

春宮の長男を春宮とて春宮の任じ

春宮の子種村種弘兄弟家督を承継する種弘の子

種弘は備前守に任じ

種弘は備前守に任じ

種弘は備前守に任じ

種弘は備前守に任じ

此社鐘銘流は元ハ... 銘文良原篤信の作

○八幡本紀、朱雀院御宇、東平寺、天慶... 鎮座

三平将門乱の起し、南海... 鎮座

東南に遣、取方長と... 鎮座

清社に... 神記歌... 春雷設... 鎮座

つる... 鎮座

三月十四日... 鎮座

三三... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

丸... 鎮座

水臨時... 寺名物... 鎮座

○寺名物

此寺... 鎮座

徳を... 鎮座

寛の... 鎮座

常田... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

... 鎮座

往入寇すつ種村事方事存の信兵衛いと云く
首領及我兵を獲たり又^三松浦を討つ

後一健院度仁三年三徳島の海賊中^い松浦を討つ

西に渡り高島を信一島を討つ事あり事あり事あり事あり

屠殺甚あり信一内川月事あり事あり事あり事あり

成形を以て^い廿二年の事あり^い船の櫂三平被る

次ははら矢を討つ事あり事あり事あり事あり事あり

備へ三三隊あり事あり山に登り野を絶し生馬大夫箱を

屠し老人力死は悉く斬殺し事あり事あり事あり事あり

運じて

船を載せ又以外木穀の類を運ぶ事あり

年い乱坊痕藉言て事あり事あり事あり事あり事あり

此等人の住人文章事あり事あり事あり事あり事あり

同の事あり事あり事あり事あり事あり事あり事あり

事不慮あり事あり事あり事あり事あり事あり事あり

事あり事あり事あり事あり事あり事あり事あり

臣種村多事朝臣明範教後等朝臣為仁平朝臣

為忠、前通事多事朝臣為仁平朝臣、薩原及近事

と警備固くし、守備せしむ。九日、賊船
は多し、押寄せし上陸。日ほして警備固くし、焼入とせしむ。
官兵の戦ひて退却せし。賊船は多く、紀古島の嶺。其後
方は海と、几帳くは高くして、兵を攻む。同日、上り未
明に賊徒早に船より、志摩の船は、
属城も、
に手配し、
神の守に、
去の申りて、
カ部平朝臣致行、前監種村、大監多宗、後致孝、

若位為頼、同為連、等兵船三、
追撃あり、向する賊徒肥前国相海、
徳代に、
合戦あり、
去の申りて、
厚力の者、
せしむ、
御遠に、
はす、
厚朝臣流、
○大日本、
寛仁三年、

冠筑前那珂郡肥前松浦郡遣前大藏權村藤原
明範等擊却之云々

帝國秘記曰、寛弘四年丁未七月己丑大隅守菅野重

忠於太宰府為大藏滿高被射殺、又曰長元二年六月

十七日乙丑今日以外記遣式部卿敦基平親王、去其叙

位、良國王叙四位、件人有加害犯之云、非王氏今被位

記、被問根元、二月十四日辛酉今日乙丑式部卿敦基親

王停職、務、涼良、或者太宰府監大藏權村等也、

先年射殺大隅守菅野重忠犯人也、及姓名謀計、

也前大宰大貳惟憲卿坐此事、傍觀等云々

。佳え物法

。方條判言為義の子、種正、八郎、長朝、和

不敵、い、え、い、心置、ま、信若、無入、ま、う、は、自、い、添、て

都、い、置、ま、は、信、若、無、入、ま、う、は、自、い、添、て、十、三、の、年、も、信、若、の

方、八、追、下、す、信、若、の、九、回、信、追、捕、使、と、ま、う、て

信、若、を、追、入、り、て、信、若、を、初、と、て、丹、心、に、信、若

信、若、を、捕、ま、え、れば、又、信、若、を、は、り、て、信、若、と、見、む、と、い、ふ、ま、う、

信、若、も、信、若、の、信、若、は、う、ら、ま、い、て、信、若、と、し、十、三、の、三、月、の

五、日、に、十、五、日、の、十、日、に、大、宰、の、信、若、を、ま、う、ま、う、十、日、後、に、信、若

信、若、の、信、若、を、ま、う、ま、う、十、日、の、内、に、九、回、信、若、を、信、若、と、

信、若、ら、信、若、捕、ま、え、て、信、若、を、信、若、と、信、若、と、信、若、と、

の、初、人、等、都、の、上、に、信、若、と、信、若、と、信、若、と、信、若、と、

下りて其後天子が朝に召せられたるは同日二月廿日
 為義年三月廿日と記すも其は前後の違はれ
 為朝の事同て上流すも其は同日の家号は神
 曆史に見たる如なり

○大蔵地之由

後の中世より歴世海中の層層として御坐の在能
 名けし厚田の地はもと厚田の九子の多き大蔵書院の地
 不此大蔵書院は姓氏祿の諸藩に記せしむる(大蔵補)
 樽原、内蔵、山口、平田、佐々、谷、火樽、井、路、
 (高補) 本は、文、右、高、樽前、高安、(高) 火樽、火樽、

栗柄、直一丹波(又)藏人、善屋、入、善屋、(高)

智王と記すは、河内、高、(高) 高、(高) 高、(高)

西、後、漢、の、雲、南、の、王、子、高、(高)

卯、全、力、(高) 高、(高) 高、(高) 高、(高)

石、秋、王、(高) 高、(高) 高、(高) 高、(高)

冬、(高) 高、(高) 高、(高) 高、(高)

有、守、(高) 高、(高) 高、(高) 高、(高)

國、是、(高) 高、(高) 高、(高) 高、(高)

聖、王、(高) 高、(高) 高、(高) 高、(高)

討、(高) 高、(高) 高、(高) 高、(高)

七縣の人民を率ゐて、（倭書）
附に親を以て、景初三年遣使、（倭書）
送して使節を以て、（倭書）
日本の事を知使節の
大守に遣使、（倭書）
その他に、（倭書）
東海にありて、（倭書）
此時の朝に、（倭書）
大皇皇后、（倭書）
東海にありて、（倭書）

此人前漢の高祖の孫、（倭書）
文前、（倭書）
書、（倭書）
阿知理主は、（倭書）
三十七年、（倭書）
と、（倭書）
四、（倭書）
帰朝、（倭書）
○日本、（倭書）
等、（倭書）
祖也、（倭書）

之なる、即獻于大饗、鶴、

後中、天の御世のなご、三韓の貢物世と、

齋藏の例の更、内蔵と、

始て、藏職を、定めて、

歴世仕として、職、

唯、

圓の、

宣て、

傳、

賜、

之、

同、

秘、

國、

麻、

忌、

後、

桓、

淳、

仁、

等、

之、

後、

齋、

始、

歴、

唯、

圓、

宣、

傳、

賜、

之、

同、

秘、

國、

麻、

忌、

後、

桓、

淳、

仁、

等、

生るとは... 種直の嫁せしめ... 故の種直は... 親み... 室盛の... 大正... 治承九年... 方師... 一家物語

高合... 院治承四年... 福... 種直... 隨兵... 盛... 家... 治承九年... 板屋...

押... 諸卿種直... 佐... 種直... 治承九年...

安徳天皇... 惟義等... 諸卿... 治承九年... 三月十九日...

東鑑... 能等... 同意... 大野... 同次部... 野中...

次郎、合志太郎、長太郎、後表以下、平兵衛、餘騎、精兵、固、関
止、海陸、往還、以、平兵衛、方人、石田、大夫、種直、相、催、九國、軍、士、二
千餘騎、遂、合、戦、隆直、等、即、從、多、以、被、疾、云々

の、鐘、西、要、突、種直、乘、勝、從、肥、後、對、陣、累、月、請、救、於
京都云々

同七年、平宗盛、家、後、肥、後、守、自、能、後守、家、自、の、子、と、稱、宗、盛、
に、遣、意、菊、也、緒、方、と、進、軍、せし、依、て、種直、も、出、勢、せ、自、能、の
力、を、得、て、肥、後、の、向、め、し、其、時、自、能、の、隆、兵、を、進、三、平、家、を、以、て
敗、つ、る、

東鑑、卷、三、和、三、年、四、月、十、日、平、家、貞、能、為、平、家、侯、者、此、間

在、鐘、西、而、申、下、官、使、相、副、教、輩、私、使、補、兵、糧、廻、國、郡

或、水、火、之、責、庶、民、悉、以、途、常、時、之、難、之、費、仍、肥、後、國、往、入、
菊、池、汝、等、降、直、為、進、常、時、之、難、之、費、仍、肥、後、國、往、入、

。盛、衰、託、壽、永、三、年、七、月、肥、後、守、能、良、降、人、を、率、り、歸、
洛、す、種直、も、可、く、上、洛、す、同、月、平、家、は、木、曾、義、仲、の、都、

を、破、ら、れ、平、家、の、所、に、一、河、の、月、御、雲、密、以、下、の、諸、軍、都、を、上、
安、徳、天、皇、を、奉、り、都、を、出、て、西、國、へ、落、下、す、後、お、種

直、も、三、千、餘、騎、を、引、率、り、乘、輿、を、發、信、國、を、奉、り、八、月、十、七、日、
主、上、を、初、め、奉、り、平、家、の、二、類、皆、大、喜、府、に、奉、り、上、つ、れ、け、る、同、日、
平、家、の、不、と、大、臣、殿、を、初、め、安、徳、等、に、奉、り、後、徳、宗、を、尊、號、し、て

信歌を張るて宮仕へせらる中にも本三位中将重衡の時
住まれしふる都北邊には神も昔の思ひ知らし
子家は筑紫の都を定め内裡とも造ち入しと公卿詮
議ありしとも都もあつ定まりしれば主上とは種直も岩
門の館に入れ奉りてまゐりて暫時らく長途の程とは休め
せむひたる

海保
今岩門の守徳村御時宗は其基跡あり又龍神山の城
是當時築置園の西まき遺蹟あり其傳ふ其跡は今安
徳村山中権宗三村の傳あり又徳村御時宗と里人は安徳
宗とまゐりて其高野山に上りて唐平のやに八所あり

畑やめし其西の隅に遺蹟あり其は其家
善提子の跡あり又其西に岩戸川の向別所村の内
道成寺にまきあり御時宗と云ふ所あり當時種直出て安徳
帝を奉迎せし遺名ありと云ふ

斯て種直は主上の勅を奉りて九國二島の觸れし律法を
備ふる集の後海軍より上方への通路を度まき非常を戒め野
心のをとは同附て時日を経りて政の從入或は國中を逐出し

此ハ其國の高麗國の海軍の多かりなり
東鑑、元暦三年六月十四日乙丑奉同守範種直同内之部義長等
受高麗使節於高麗國之間對馬守親光歸着彼島之
是去々年自當島欲上洛之節平家雲雲落子鎮西之間路次依不

道、不能解纜、横江在國邊、為甲綱、言知盛卿、弟亦
 種直等奉行、可令參屋島之由、及催九州三島中國等
 皆難從于平家之方、親光相違志源家之間不行、仍
 三個度被遣進討使、乃謂高次郎大夫經直種直家子
 兩度、非甲領使宗彦種直家子、一箇度也、此轉頻下國或
 知行國務、或及合戰、難存命之間、凌風波去三月四日、令
 越度高次郎國之
 かくて西邊道は種直、自風に靡き、平家いれくものちり
 同九月、王上太宰府參軍、運るは、一院に平家は皇族の御
 木丸殿と申さふこと人の運持しぬの故、太宰
 存は終り、おかしきことなり

斯うして、所い豊後の住人、種直三郎維義は、多る海白の属、白木
 方次、等々に同して、太宰府を攻めんとす、是管へんは、種直は
 惟盛兄弟、菊池次郎隆直以下、官軍は、防をせられんと
 多勢あり、敵しかくく、遂に王上は、太宰府を、遂に攻めて
 箱崎を、過り香椎、隔、森末山内、浦濱、蓋屋を、とす、
 所を、經山内、兵藤、次、秀、遠、を、種直、山内、の、城、に、入、せ、た
 遠の下知、い、は、む、事、子、孫、に、傳、へ、て、口、傳、を、いし、と、す、
 菊池、次、郎、種直は、多、島、御、の、下、知、を、受、け、肥、後、國、大、井、
 山の、園、つ、あ、の、園、を、も、と、す、種直、の、塞、ま、し、を、切、は、り、王、上、と、いれ

奉らむとて道より三浦の村に於て松浦黨は疾の平家等
 北原の源氏に降伏せしむるに平家は西國のにも居着せり。并族
 の中有り酒部ひはま
 附録に松重盛の病氣の折節を記す。當時酒部ひはまは
 未居りしに唐流と云ふものありて其父は盛盛といひ
 通せしといはる。盛盛記の人も其書のものに種直其母
 豊西記の酒部ひはまは後々平家御方。結京田種直再二
 雅誘諸。永秀乃敢以不承引奉。唐原氏待録。愈下知依之
 種直可。進討。世有共聞之間。先引。籠。櫛。寄。城。官。軍。二。度。及。雅

押寄。兼。康。人。之。陸。軍。其。後。平。家。御。在。於。本。陣。時。永。秀。乃。初。押。寄。於。三。重。宗。遂。合。戰。之。思。終。奉。退。落
 平。家。也。此。時。永。秀。永。常。三。郎。永。隆。婿。男。四。郎。永。俊
 母。は。常。田。種。直。之。妹。也。平。家。逆。亂。前。格。別。之。上。他。各。也。此
 日。田。氏。は。日。田。鬼。太。夫。と。云。昔。不。合。尊。宗。三。の。子。紀。州。既。野。出
 大。藏。大。在。因。て。大。老。と。云。て。本。姓。と。云。ふ。其。祖。慶。西。の。比。す
 九。の。下。り。文。德。元。年。仁。壽。元。年。始。て。日。田。部。司。職。た。り。し
 と。云。せ。り。押。の。五。家。祖。の。事。は。と。云。ふ。大。老。は。春。三。の。事。也
 以後を續ひて其の事ありしものあり
 平家の退るる種直の退り

宗國飛來雪と尋て山嵐博く兵を以て遠を特ひし
征諸方を新原氏に逼り十方降服して押寄る國に
平家の
屋島の橋の内を擧げて討つるに
二月の節
平家遠征討負けて三月に平家國權浦に落ちたり
入れしをいひしに五月に平家國權浦に落ちたり

庭の沈没

附云

大同七年秋九月三日西宮初所新河以戦艦八百餘艘
進攻平族於海上山嵐秀遠及び菊や高道平家
運矢射之我兵少退云々三月平家大敗菊や高道原
田權直皆降す
此時權直原家後遺言を以て原氏招すの天降
たる河守範朝等勢を以て三月に平家原家書屋洞あり
父美多
東鑑
元暦三年六月平家文治五年三月平家平家出雲範朝

渡邊の國に北條の部下河邊庄司俊光庄司品川三郎等今

先登石全の於草屋圃大徳少部種直子俊摩兵衛尉等引

隨兵相違之批戦行平重國等縣廻射之住軍種直等

皇國神射行平誅美氣三郎數種之三月與會

種直對干草屋圃復上子嘉摩兵衛尉兵敗走(親)の

為に善時緑原乾勢擊傷種直於是後

初のま上後初の御事あるは常種直萬池種直忠節

群の起りも勳功の費行の種直は後初の御事

取後守に補任せらるは平家の知行殊使常池種直

極勢のま上も持平の御事あるは後初の御事

士は多く種直の連なりは種直種直と力ある事

三種の神矢と常事ありわねは後初もま上は天道の

叶ひ神明も守護ありぬすは斯く平家の成行もは

日比の驍勇増強して人改の背は敬事のみは皇國家

の正軍は始終平家は昭爲の一天萬衆の天を降下を奉し

是の身と善を身と皇國難功人の怒を以てさし

當意と取らぬは討死の生捕せらるは事ある

斯くて天は久事朝後連相傳と善事あるは事の種直

握せしは後平家の同心と志事あるは事ある

人をもつて元暦二年七月、種田方施行の條に曰可上
美氣大蔵の於、宗事、各可召上、乾頼之言、雖被
仰下之云々、萬代、萬代、同意、平氏之輩、公使、朝臣、并
究之由、二品、即、朝、全、復、奏、三、平、家、後、信、領、種、田、種
遠、秀、遠、善、所、領、有、田、松、井、山、廣、米、所、事、初、定、種
地、額、之、程、若、置、計、法、人、心、詳、可、被、歸、汝、由、三、又、此、程、の
去、上、状、に、種、田、種、田、種、田、秀、遠、之、所、領、者、依、為、後、唐、之
所、任、先、例、可、置、計、方、職、事、雖、今、存、候、且、先、亦、種、田、之
由、事、於、今、不、成、改、良、何、以、自、給、之、所、不、及、成、改、良、事、之
條、今、の、事、亦、存、の、邊、置、事、内、此、等、の、事、に、種、田、種、田、種、田、之、所、領、

も、後、唐、の、事、に、の、み、の、事、に、其、の、國、果、入、百、其、の、事、に、武
者、可、事、置、計、方、の、事、に、種、田、種、田、種、田、の、事、に、武
月、と、事、に、の、事、に、種、田、種、田、種、田、の、事、に、武

附、云、云、種、田、種、田、種、田、の、事、に、武
大、臣、の、事、に、種、田、種、田、種、田、の、事、に、武
如、種、田、種、田、種、田、の、事、に、武
御、宗、不、救、再、恐、知、代、の、事、に、武
心、忍、之、事、に、種、田、種、田、種、田、の、事、に、武

三十三

土方在田日記要聞上簿之書抄

三年八月廿六日(十八日)の事(京師)御座

十時頃、大佛へは参詣す、夜四時頃、又へ着し、暮は、大川

三十三

二十日、芥田川着し、舟に三十三、置、舟中、舟人は着

三十三、舟中、舟人は着、舟中、舟人は着

二十三日、備後、朝、舟中、舟人は着、舟中、舟人は着

水、舟後、舟上、舟中、舟人は着、舟中、舟人は着

、

舟中、舟人は着、舟中、舟人は着

舟中、舟人は着、舟中、舟人は着、舟中、舟人は着

舟中、舟人は着、舟中、舟人は着

三十日 信濃島を私に時名新漢の意

九月 了名を私に福川の由を信し夜九時と田舎へ

着

三 三徳公拜謁

七日 九州下向ノ正親偏入拜謁は暇乞
分お市ハ常陸ノ州に於て、松木ハ加賀百澤ノ藩に
三三郎ハ四人同伴し七時ハ表上トテ三三郎ハ赴ク夜半
三三郎ハ表上

九月 信濃島を長州奉山新漢へ移居

十日 和州信濃島加賀田所 五人此来より陸行 お市ハ
和州信濃島 夜半瓜取り生ぬ

十日 小倉着船 船前へ途中 正親町へハ 坊々 意匠

出立ノ多ク 同キ引込シ七時比小倉出立 馬園へ

十日 徳田傳人へ面接 色ハ 誠諦 畫比 同キ

三三郎 驛手して

十日 三三郎 入信

十日 小倉より 寧ろ公に 奉ル七時 下向 常凡七時ハ

直木ハ 雲霧ハ 山田十郎 例上 御方ハ 無二 藩内 寺ト

寺相 公ハ 陽見シ 色ハ 誠諦 畫比 同キ

山田十郎 高杉 信濃 島 意匠

十日 高杉 山田 信濃 島 意匠

十日 夜 多夜 中村 九郎 信濃 島 意匠

二十日 平野より丹州へ同行し、はるき暮れ十月十日
丹波に義兵より輩れ、元但馬に押寄せ、為に仙石の軍
多田孫次郎同行し、はるき暮れ同日今日出立の儀
長門守公此夜に京へ回侍の儀

二十九日 長門守公朝日に京へ下り、而も平一三郎
今日山へ入り

十月二十日 平野三郎山より帰入、此夜澤公殿去
平野に宿留し、土着の兵隊而も平一人斗は供え大馳
御起し、直し平の三三追掛也、四條に出立、先
時不覚廟直し待り

三十日 平野より、直し、追懸うら、不覚、三暮れ、引
返し

多島二馬園より、帰来

二十日 皇朝、田代、中、九州、越く

十八日 飛前、信玄、多島、三島、藤原、田代、中、九州、越く

二十日 多島、山、三島、藤原、田代、中、九州、越く

二十日 上ノ園へ入

二十日 陸州、長原、後入

二十日 大判、下、不覚

二十日 大判、下、不覚

二十日 三島、藤原、田代、中、九州、越く

二十日 三島、藤原、田代、中、九州、越く

三つ 夜多野越 庵川 山崎 崎野 崎野 崎野
難知なる

三つ 右岸 左岸 山崎 崎野 崎野 崎野
右岸 左岸 山崎 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野

三つ 山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野

三つ 山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野

三つ 山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野

三つ 山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野

三つ 山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野

三つ 山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
山崎 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野
崎野 崎野 崎野 崎野 崎野 崎野

部衣束りぬす執極漢中甲申日...
田依し清水源五右衛門...
酒肴持参り夜四時以降

下分石川...
三石喜...
二月...
三月...

同行し直末...
八日野村...
...
...

此の夜前より降ぬりと

九月此度義舉...
...

ハ此度義舉...
...

...

...

川果、甲村九郎、久夜義仲、入江...

百々...
...

二章し海舟行て浮海あり

十号條の條前し於て上志あり後割し浮海有り

十号条し門後之向し何し毛生云

十号条し百来和氣全菊四一落州後二十人出云云

十号条市ハ秋於途中佐乃西側同伴し騎し

行り九條比定市ノ着久候之遊撃隊並徳重出向不

出雲し信海ニ田鹿入行り五度折所市ノ福原

後着止し五條辰親甚し和泉ハ段出多し後進二

断く尚馬直相別し三四鹿入行り五度至之南馬

前比取多し夜四時止帰ん

十九日取前し赤坂平方代安元夜多子常女也

八番し直多り里田山御云 卷云ハしは元

高き御持来り
飛ハ

前部書空帯
白馬(馬身)白馬
各取
トラス
御持

十号条市ノ
形は
御持
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

後書
御持
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

十号条市ノ
手取
七印ハ

三日月に
見ゆる
八十九

皇師より喜翁の上りし御歌ヨロシク大龍寺天王山之
有志あり七親類書家等平の出家守匠久隆等
傳せしむりし何村能きよし同根ナリ

二日 土方及るる御時へ而るる多田石東門外もあはれ
八日 無三渡部新三郎の月方晩方長足し今日あ
地着上あしる御甲上は進氣多保しなり二回し
三三し也なり

九日 無三渡部百竹ありと七谷川能きあはれ着し甲
あし御時承りし喜翁よりあし来りし御歌

十日 無三渡部御時へ御歌より下無三日所仕神
今日長足し上あし長足なり御時へ無三渡部御時へ
井上御時へ而るる御歌より無三渡部御時へ

のり

十三日 世子の御時へ御歌より

十四日 喜翁の御歌より

十五日 三喜世をせし御歌より

十六日 喜翁の御歌より

十七日 喜翁の御歌より

十八日 喜翁の御歌より

十九日 喜翁の御歌より

二十日 喜翁の御歌より

二十一日 喜翁の御歌より

二十二日

二十三日 喜翁の御歌より

十九日 朝比野

二十日 朝比野

二十一日 朝比野
二十日 夕度 朝比野 七時 以上 朝比野 朝比野 朝比野
朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野
朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野

二十一日 朝比野
二十日 夕度 朝比野 七時 以上 朝比野 朝比野 朝比野
朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野
朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野

二十一日 朝比野
二十日 夕度 朝比野 七時 以上 朝比野 朝比野 朝比野
朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野
朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野 朝比野

二十一日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

二十日 朝比野

古時書の十冊
多し時多し所
一冊也

しつれおん

カクをねむりては多し蓋は第にほ道アリし七時此破
あつちあり遠きもの跡年神々しし

二万敵軍略しりに凡流のキリもつた出るせうん
五三毛道義一由をアリ

下たつぬや部しとに生る

八分世回条の條るニナカ部三出馬

たる条云士せの山に飯へ進み兵社御一由アし八為とらと
比備別アル

十りの国を放し毛利益人(ふか)物を逐せし衆は
土万無三因備よ 帝事り事あしる性リ昔一

十の条云せも騎るニナカ部せもし陣あへん
カク川に三 常帯兵共んノ風説アル任テ隊出共ねん

福由良印へ色進)之し備向ノ奇兵隊来りテ八和御
婦りんぬ蘇之州久 勢保やしらん

十の 福前 手傳云三人平ん在攘夷之し因るあなり
十の 常帯兵隊多し人平ん在攘夷之し因るあなり

三の 奇兵隊福由良印高杉晋松来り傳云相傳し
備前行り止ふまぬ九儀更ハスわうト云う

三の 万策を度者ノ強きノ上院迄を即しとる傳云
三の 四の 無三電ニナカ部云

三の 五の 福村来りテ高杉に説く

九月十七日 信濃 赤松 義家 孫 義弘 心配人
三の 六の 右田 常(重) 而 信濃 赤松 義弘 止 三 困 即 云

田中仕師中夜屠陽又

五月一日未川故し喜勝武人八面扇又信瑞丸起り人
大心起久

方多無三三四尾身一陽来

麻尾

方多無外西士陽一也又

十方多無後後田孫丸其行り此方多田仕師来
九州初し探取丸

二十方多 軍見三印市八行り此常四印一之而常兩人
方多肥前八行り

千方多 以多野等武人後後兜也之親族種七也常六
小一常取一以多野也市八行り而常又前田孫丸一度
遠内先方、大机也、仲、杉島幸我、杉島孫氏

後孫系毛利至人山田又中村田以三印少ぬ丸
且外海忠人皆免役親族種七信通勝又信
隊八守性表三子丸集丸君三父子信通孫氏
表八家印子好常置一安せ丸

千方多 言れ一ハ野村市八行り志共六身日常事一而田
し常色信佐ノ指孫リ西陽し西陽り孫也
方多 常是馬し唱三信佐へは出強

四二信世半印 今般者無之何信へ好取一而海取
皆三ノ今信事一山九正者一常事ハ常丸信事
以方多ハ勤勤者ノ出久

二方多 言信云一信事トシ一信海し勤勤者ノ出久
方多 勤勤者ノ出久

八日土戸登城候御り陸久の御使共歳暮の御事
十日土戸に御名をいれしを省へ行く
十一日土戸御所へ御参り候御事
十二日土戸に御参り候御事
十三日土戸に御参り候御事
十四日土戸に御参り候御事
十五日土戸に御参り候御事
十六日土戸に御参り候御事
十七日土戸に御参り候御事
十八日土戸に御参り候御事
十九日土戸に御参り候御事
二十日土戸に御参り候御事

二十一日土戸に御参り候御事
二十二日土戸に御参り候御事
二十三日土戸に御参り候御事
二十四日土戸に御参り候御事
二十五日土戸に御参り候御事
二十六日土戸に御参り候御事
二十七日土戸に御参り候御事
二十八日土戸に御参り候御事
二十九日土戸に御参り候御事
三十日土戸に御参り候御事
三十一日土戸に御参り候御事
三十二日土戸に御参り候御事
三十三日土戸に御参り候御事
三十四日土戸に御参り候御事
三十五日土戸に御参り候御事
三十六日土戸に御参り候御事
三十七日土戸に御参り候御事
三十八日土戸に御参り候御事
三十九日土戸に御参り候御事
四十日土戸に御参り候御事

二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日

二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日

二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日

二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日

二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日

二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日
二十日 辰張也二智し名代石川信房 同付戸川三三三 廿日

二十七日 自江戶出陣 伊佐野 幸高 高山 幸高 以上陽兵 凡
三十分 程 東上迄 右腰 及 信長 以上 七名 兵 凡
三十分 上迄 西度 幸高 以上 西殿 以上 信長 以上 陽兵 以上
以上 凡 以上

二十七日 自江戶出陣 伊佐野 幸高 高山 幸高 以上陽兵 凡
三十分 程 東上迄 右腰 及 信長 以上 七名 兵 凡
三十分 上迄 西度 幸高 以上 西殿 以上 信長 以上 陽兵 以上
以上 凡 以上

二十七日 自江戶出陣 伊佐野 幸高 高山 幸高 以上陽兵 凡
三十分 程 東上迄 右腰 及 信長 以上 七名 兵 凡
三十分 上迄 西度 幸高 以上 西殿 以上 信長 以上 陽兵 以上
以上 凡 以上

二十七日 自江戶出陣 伊佐野 幸高 高山 幸高 以上陽兵 凡
三十分 程 東上迄 右腰 及 信長 以上 七名 兵 凡
三十分 上迄 西度 幸高 以上 西殿 以上 信長 以上 陽兵 以上
以上 凡 以上

謹此過刻之失禮之至也予之諸派會議之頂
上之也予之追附根株之入來之由畢而阿彌陀寺
若若之端起申自之在預高之持會之後以八仕不
此彼御尋問之度是也持侯也

三區一乃

那唯人授

月取後記

忠孝之遊度也存之孔之予然之好也
孝一武之氣象也存之而慕之及人物
忠孝之出人孔子之天子義以為當也教
海之文字也存之國之治之可使之當也
知方之志也存之方之義也予之知也而自
才義以為當之學問也一國之推及也
志之存之也存之國也存之學問也存之

及之由工夫之上大祿重職之家分少身
之諸士之實用之學問を勵む用事在之
上から以て御政道而之なり其の中より致
上を取計とて御學之道を計りて是を
大由學問とて御武術とて御引
立に御事御事一と其の中御家中一統
奮勵仕武術力と竭強強と成生る也

表は如く臨中多き由に藝術の限を
働く能く如何程に御務利しう其座
甘存は是と大由武道とて又御推及
り成方諸君孔明後主とて上り云、言
中府中の一體とて其の中一興とて
府中一表は是に御政道一是御興表は各
體とて御事御事とて成りて其の

以神引之、故方法多貴、對其外、
坐前、法と示し、後、勤惰と察、貴對
之以、鼓舞仕、中、其法、如何、貴
對、如何、神、引、之、表、也、打、合、を、以、
之、後、其、每、日、以、併、前、後、に、推、及、と、
神、引、之、不、可、也、其、法、也、神、引、之、
也、其、法、也、其、法、也、其、法、也、其、法、也、

此、應、人、筆、學、教、の、體、
ハ、善、自、本、と、其、の、善、自、本、
其、若、修、行、不、仕、
依、之、修、行、之、規、則、
之、規、則、即、前、後、
大、神、即、神、引、之、
也、其、法、也、其、法、也、其、法、也、其、法、也、

此乃年所象也善所本也為成度也
中野且中野也

與雲院様中或功多喜也高也中野也

り中野年々一陸り為替及也中野元也

心付也中野元元記及中野大人様也

中野家也中野元也中野元也中野元也

中野元也中野元也中野元也中野元也

而中野元也中野元也又中野元也中野元也

中野元也中野元也中野元也中野元也

命也中野元也中野元也中野元也中野元也

中野元也中野元也中野元也中野元也

中野元也中野元也

與雲院様也中野元也中野元也中野元也

中野元也中野元也中野元也中野元也

ハ時勢を異に初て聖人の道は唯今表情難則
又今中國に不徳形勢を以て其形現を顯
ハ一宗に於て其徳ハ

與皇國様所代ハ乱レ終唯今ハ乱レ萌生
ハ若くは傍道逸樂の仕時為る事歴々
存ハ

一 沖學問ハ沖國政ハ基本ハ自勵ハ也 及事

ハ了學問ハ却ら時ハ事物ハ事成ハハ事
ハ事成ハハ事成ハハ事成ハハ事成ハハ事成
高位ハ事ハ沖孝道如何ハ事成ハハ事成
是事ハ事成ハハ事成ハハ事成ハハ事成ハハ

學問仕ハ事多文字ハ是ハ事ハ事ハ事ハ事
ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事
或事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事

人と輕侮は、秘列の案也。多し。以て免角快
事。一句と其意を以て一中心に用進。志は中
事。一が是れ。大有経書。より。多。秘。命。の。理
之。事。否。中。之。是。非。と。より。亦。和。漢。歴。史。と
より。秘。命。の。中。途。より。多。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。
強大。此。計。策。は。我。の。秘。利。中。心
神。心。より。多。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。

之。以。手。通。史。記。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。
我。國。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。
秘。命。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。
示。士。年。必。死。と。より。多。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。
大。度。の。英。雄。才。藝。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。
秘。命。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。
軍。の。大。中。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。の。秘。命。

与奇正互用因敵制勝之中心也
馬讓且傳言軍中立威行惠之中心
也古之稱之也古和書之曰和身平時
逢之稱之也稱之也又之益中
也古之稱之也古和書之曰和身平時
逢之稱之也稱之也又之益中
也古之稱之也古和書之曰和身平時
逢之稱之也稱之也又之益中

孝也或布之于水活之也古之稱之也
古之稱之也古和書之曰和身平時
逢之稱之也稱之也又之益中
也古之稱之也古和書之曰和身平時
逢之稱之也稱之也又之益中
也古之稱之也古和書之曰和身平時
逢之稱之也稱之也又之益中

あり理の居止不歸 小とゆふく 小密儀より
 正衣冠を為整 与大とゆふく 小下
 取扱心より有り 上は存念均手 小勤勞
 起ヶ概 汝を以て 衆中 爲 無及く 爲之
 ヶ概 汝を以て 衆中 爲 無及く 爲之
 思慮 げ 中 皆 下 對 不 爲 隨 思 仕
 業の習 削 節 務 度 本 爲 下 小 務 也
 此身を以 水衣 食 住 小 物 好 不 爲 在
 其末 以 一 圓 小 物 財 物 助 助 也 中 是 之
 概 水 奉 小 物 打 合 小 通 及 出 終 出 財 者
 少 中 能 也 有 事 取 入 者 約 以 我 小 務
 譬 米 穀 小 物 性 大 概 辛 苦 仕 者 小 中
 与 思 言 小 務 方 下 通 概 夫 之 更 物 小 打
 合 通 及 小 物 中 表 打 合 不 也

以之為程善也心為年而中政子題也
一孟子之徒善不足以為教者此中一也
又曰高、養志之養曰體、予之論曰大者
之志、予之先德、則予之象風、之德、則予
之德、則予之象風、之德、則予

伊先視樣之松伊男武、以象、予、中
伊代、之松伊史、持柄、之為、予、中

伊文上樣之松、以志、之、予、中、彼、是、以、為
合、均、年、以、象、風、之、為、予、中、予、以、為、予、以、文

項、之、其、予、之、其、養、志、之、予、中、予、以、為、予、以、文
也、志、伊、廣、發、興、也、是、以、為、予、中、予、以、為、予、以、文

也、志、伊、廣、發、興、也、是、以、為、予、中、予、以、為、予、以、文
也、志、伊、廣、發、興、也、是、以、為、予、中、予、以、為、予、以、文

八月廿五日 高本 拾八

奥の細道

長月廿三日 松本を去る

大内蔵

秋夜

秋晴

古書

浮舟

松浦

田家

鴨

麻

三月

三月

三月

〆

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

海苔

海苔は、磯の潮風を吸った独特の風味がある。その風味は、食欲をそそぐものである。

喜月

喜月は、冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

喜月

喜月は、冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

梅

梅の香気は冬に最もよく感じられる。その香気は清く、凛々としたものである。

五月
The first of the month was a fine day
and the weather was very pleasant
and the wind was very light

六月

三伏
The first of the month was a fine day
and the weather was very pleasant
and the wind was very light

七月

The first of the month was a fine day
and the weather was very pleasant
and the wind was very light

八月

二日
The first of the month was a fine day
and the weather was very pleasant
and the wind was very light

九月

The first of the month was a fine day
and the weather was very pleasant
and the wind was very light

十月

The first of the month was a fine day
and the weather was very pleasant
and the wind was very light

十一月

The first of the month was a fine day
and the weather was very pleasant
and the wind was very light

Handwritten text in a cursive script, likely a page header or introductory text.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

Handwritten text in a cursive script, continuing the page's content.

若 級 情 酒 養 楊

Handwritten cursive text in the right column, starting with a large character '若' and continuing with several lines of fluid script.

山 心 筆 草 如 祝

Handwritten cursive text in the left column, starting with a large character '山' and continuing with several lines of fluid script.

嘗 神皇正統記の御代に於ては
皇室統 大元帥の御代に於ては

神皇正統記の御代に於ては

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

御代

神皇正統記の御代に於ては

神皇正統記の御代に於ては

海 神の御心を
 大元の大元の大元

梅子 梅子の御心を

海 〇manteの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子

梅子 〇meziの御心を

梅子

梅子 〇meziの御心を

梅子

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

梅子 〇meziの御心を

澹 神にまじりて
宮を統 大元のみま

擇りて思ひ

此後二子も
天に歸るは

子梅

此の世を
いふは

川原の清き
たけの

うらやま
梅子の

あはれ

その清き
その

繪 神楽のしるし
宮内院 大元帥のしるし

揮毫 西行のしるし

西行のしるし

はげしきしるし
天正通記のしるし

天正通記のしるし
天正通記のしるし

お梅

お梅のしるし

お梅のしるし

お梅

お梅のしるし

お梅のしるし

お梅

お梅のしるし

お梅のしるし

お梅

お梅のしるし

お梅のしるし

お梅のしるし

海神の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

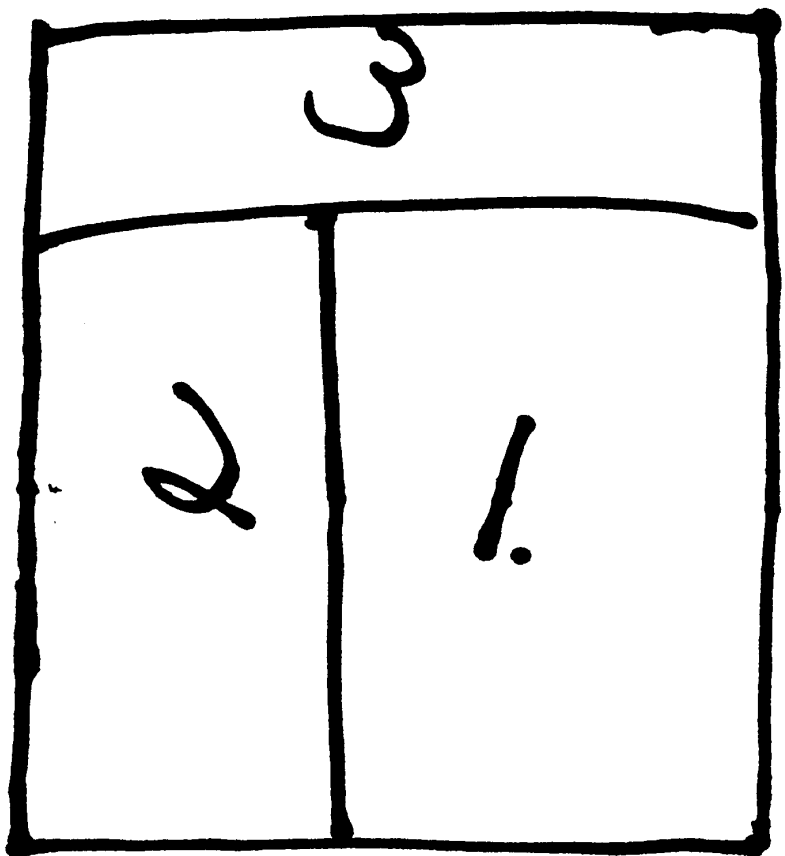
梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

梅の御名を
宮内院大司のまゝとす

1. 2. 3. の順序で

分割撮影



海 神のいし海の
宮を統大元のみとて

梅より田のいし

此の海にちよひお日平喜ぶ
天の海神は梅のうき

あ梅

海 深

梅のうきをたのむ海の深き
いしに梅のうきをたのむ

いしに梅のうきをたのむ
梅のうきをたのむ

梅のうきをたのむ
梅のうきをたのむ

梅のうきをたのむ
梅のうきをたのむ

梅のうきをたのむ
梅のうきをたのむ

梅のうきをたのむ
梅のうきをたのむ
梅のうきをたのむ

海 神の御心
宮内院 大内卿の御心

梅の御心

梅の御心
梅の御心

梅

梅

梅

梅

梅

梅

梅の御心

梅の御心
梅の御心
梅の御心

澹 神楽のいほり
宮天統大元の名もいほり
梓乃田のいほり

比治二子よりおのり日平五郎殿
天國御代はむのり三平五郎

お梅

源 宗

おのり三平五郎殿
天國御代はむのり
三平五郎

お梅
源 宗

比治二子よりおのり日平五郎殿
天國御代はむのり三平五郎
お梅
源 宗
比治二子よりおのり日平五郎殿
天國御代はむのり三平五郎
お梅
源 宗
比治二子よりおのり日平五郎殿
天國御代はむのり三平五郎
お梅
源 宗

尋梅

雪もさく宿のそをゆめいふものいかに梅の影の

梅初見

けいふねあふあふあゆめいふものいかに梅の初見

雪中梅

ゆり梅の雪の寒さより梅の影の白梅

雪中梅

たの梅の影の寒さより梅の影の白梅

暖梅

あまの梅の影の寒さより梅の影の白梅

夕梅

夕の梅の影の寒さより梅の影の白梅

あつちの梅の影の寒さより梅の影の白梅

日暮梅

日暮の梅の影の寒さより梅の影の白梅

梅意気

梅意気の影の寒さより梅の影の白梅

梅意気

梅意気の影の寒さより梅の影の白梅

信風梅

信風の影の寒さより梅の影の白梅

折梅

折梅の影の寒さより梅の影の白梅

梅意気

尋梅

昔もきく梅の花をちかむるはよのひかたも梅さるるぬ

梅の神元

いひかぬあつあるよのあまをさるる梅の神元

雪中梅

やう梅の雪のあまをさるる梅の神元

雪中梅

たの梅のあまをさるる梅の神元

梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

夕梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

折梅

あまの梅のあまをさるる梅の神元

梅

けいりあねあふあまのまゝさなまのしるねり。梅の神を
書中梅

やう梅のさの雲のまのうらみとてさのうらみの白梅
書中梅

たの梅り梅の梅かるとえさうのさの梅の白梅
梅

さのさのさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
梅

さのさのさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
夕梅

梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
夕梅

梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
梅

梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
梅

梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
梅

梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
折梅

梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
梅

梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅のさの梅
梅

梅堂

芳名はつらき梅のこゝろは梅の木の影にありて

山梅

人よぬ山梅の梅の影にありて

山梅

梅人の道は梅の影にありて

梅

梅の影にありて

梅

梅の影にありて

梅

梅の影にありて

梅

大梅の影にありて

梅堂

昔のうらやまの梅の影をしのびて

山梅

人づからいふ梅の影をしのびて

山梅

梅の影をしのびて

山梅

梅の影をしのびて

山梅

梅の影をしのびて

山梅

梅の影をしのびて

山梅

大木の影をしのびて

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

横山堂主人製

二五九上
一候あり
二候あり
三候あり
四候あり
五候あり
六候あり
七候あり
八候あり
九候あり
十候あり
十一候あり
十二候あり
十三候あり
十四候あり
十五候あり
十六候あり
十七候あり
十八候あり
十九候あり
二十候あり
二十一候あり
二十二候あり
二十三候あり
二十四候あり
二十五候あり
二十六候あり
二十七候あり
二十八候あり
二十九候あり
三十候あり
三十一候あり
三十二候あり
三十三候あり
三十四候あり
三十五候あり
三十六候あり
三十七候あり
三十八候あり
三十九候あり
四十候あり
四十一候あり
四十二候あり
四十三候あり
四十四候あり
四十五候あり
四十六候あり
四十七候あり
四十八候あり
四十九候あり
五十候あり

秋のけしきも日ごとに清くも
 ついでに清くも秋の清けは
 志ありし時を月日は過ぎ
 一しよの清のこころも
 秋のけしきも日ごとに清くも
 ついでに清くも秋の清けは
 志ありし時を月日は過ぎ
 一しよの清のこころも

秋のけしきも日ごとに清くも
 ついでに清くも秋の清けは
 志ありし時を月日は過ぎ
 一しよの清のこころも

秋のけしきも日ごとに清くも
 ついでに清くも秋の清けは
 志ありし時を月日は過ぎ
 一しよの清のこころも

秋のけしきも日ごとに清くも
 ついでに清くも秋の清けは
 志ありし時を月日は過ぎ
 一しよの清のこころも

秋のけしきも日ごとに清くも
 ついでに清くも秋の清けは
 志ありし時を月日は過ぎ
 一しよの清のこころも

秋のけしきも

ついでに清くも

秋の清けは

志ありし時を

月日は過ぎ

一しよの清のこころも

月のひかりにやわらぐ夜の静けさ

夕陽景

夕陽の光が水面に揺らめく
おひさまの輝きをうけて

夜

静かな夜の空に星が
きらきらと光る

朝

朝の光が窓を照らす
新しい一日が始まる

朝の光

夕陽

夜の静けさ

朝の静けさ

夕陽

夜の静けさ

朝の静けさ

夕陽景

夕陽の光が空を染める
おひさまの輝きをうけて

夜

静かな夜の空に星が
きらきらと光る

朝

朝の光が窓を照らす
新しい一日が始まる

夕陽景

夕陽の光が空を染める
おひさまの輝きをうけて
おひさまの輝きをうけて
おひさまの輝きをうけて

迎謝罪タリト飛報集モカコト早夜ノ功カニ密翰
 ラ依直ニ千尾存ス高教ノ報告シ歟此時ニカコト早夜
 千尾山山ハニアリテ迎向ニ取リ書問ヲ繕キナカラフ
 カ彼キ翰ヲ披クテ之ヲ讀ミヤ否遠敷行ノ由実ヲ録
 書問ノ投捨ノ煩々ノ跡述シ望東尼ニ謝シテ日事也
 又ニミセルハ自取早安閉ト他行ニ潜居スルキニ非ス此
 乘ハカカ運フスニ任セ美任ヲ專リテ日ヲ出テス役ノ俗
 論誅滅シテ長洲月兒膽ヲ御覽ニ入モ數百ノ窓
 願謝スルニ辭ふト早ヤ出マセシスル色スニゾ望東尼
 當リテ望東尼ニ百歌ヲ録シケル

撰出書表名表

昔カラ又命「カ」ハ父良花

西井ニヤカニ春マツバキ

高教ニシテ謝吟スルニ數聲ノミニ創ナル瀨口三丘律ヲ
 願ニ瀨口君來リ給フト千尾ノ別はシムテ百三傳及
 不堂傳ナク大分傳ヲ作ルルニ思ヒテハマヤル

73
 千尾山山ハニアリテ迎向ニ取リ書問ヲ繕キナカラフ
 カ彼キ翰ヲ披クテ之ヲ讀ミヤ否遠敷行ノ由実ヲ録
 書問ノ投捨ノ煩々ノ跡述シ望東尼ニ謝シテ日事也
 又ニミセルハ自取早安閉ト他行ニ潜居スルキニ非ス此
 乘ハカカ運フスニ任セ美任ヲ專リテ日ヲ出テス役ノ俗
 論誅滅シテ長洲月兒膽ヲ御覽ニ入モ數百ノ窓
 願謝スルニ辭ふト早ヤ出マセシスル色スニゾ望東尼
 當リテ望東尼ニ百歌ヲ録シケル

二海也上

一候方カ

一候方カ

一候方カ

一候方カ

一候方カ

Handwritten vertical text on the left side of the page, likely bleed-through from the reverse side.

Table with vertical lines, possibly a ledger or record book.

Vertical text labels for the table: 北洋海産物の綿 (Northern Ocean Sea Products Cotton) and 十里村青田 (Tenri Village Awa no no).

Handwritten vertical text at the bottom left: 二番目上

Handwritten vertical text at the bottom left: 北洋海産物

Handwritten vertical text at the bottom left: 一俵百斤

Handwritten vertical text at the bottom left: 十斤

Handwritten vertical text at the bottom left: 五斤

Table with vertical lines, possibly a ledger or record book.

Table with vertical lines at the bottom of the page.

Vertical text label for the bottom table: 獲古堂支店製

Blank lined writing area on the top half of the right page.

Blank lined writing area on the bottom half of the right page.

復古堂支那製

二海船上

海面上

海面上

海面上

海面上

海面上

たしりての海面上

此書は海軍の編

一四

十里松林 昔年海軍史

海軍の編み物... 海軍の昔年史... 海軍の編み物... 海軍の昔年史... 海軍の編み物... 海軍の昔年史... 海軍の編み物... 海軍の昔年史... 海軍の編み物... 海軍の昔年史...

侍従下河守慶資は其家老を以て薩浦上流に發
用人伴村忠尚治等とを召寄せ禮をさし奉る其大目下と
し禮を乞ふ長門之助後之君良之助慶長
正月に慶長五年乙未二月二十日侍従下河守
方納言は二條岡白殿下の宿舎を以て善州中津原の
内、長門の庄殿を以て別荘とす之を更せしめしは別荘
振本の足立とす又た七神の上流宿舎との事云々云々

歴代書

其の別荘の宿舎は其の庄殿を以て別荘とす之を更せしめしは別荘
振本の足立とす又た七神の上流宿舎との事云々云々

二條の上

七神の上

宿舎

庄殿

別荘

侍従下河守慶資は其家老を以て薩浦上流に發用人伴村忠尚治等とを召寄せ禮をさし奉る其大目下とし禮を乞ふ長門之助後之君良之助慶長正月に慶長五年乙未二月二十日侍従下河守方納言は二條岡白殿下の宿舎を以て善州中津原の内、長門の庄殿を以て別荘とす之を更せしめしは別荘振本の足立とす又た七神の上流宿舎との事云々云々

天重頼頼中尉 五色河津度一箱を
押し手々 沖前に往くは甚き所也沖津多室防より敵を
そはせしむるの事也

正平百四十四

厚島嶽より長州へ至る家悔悟之淺海越へ可甚

力甚敷く不慮の事ありし故に上瀬の可遠海之事

乙巳日

海へ度度とあるは海老田山崎より之は入國の目録事
を多し南島の遠に就中九日平。長州の形は往く長
唐封天と野原せり。事なるなり

長州上

之四

乙卯長島海防はむ村を築くこと惟く一月年なり其
を其に日二十日於て海軍野中持守也。は海軍
れ一外其拒絶の期限は其の五日十日とす其定はは其
々軍海軍相替の陳夫持守す。其の敵首の強一海軍
之れは其軍一統に其の五日十日の多其は海軍同海軍
の異艦一白の砲艦の軍艦は其の月には其異艦四つ
各山子子海軍他の砲艦を砲撃し刺して其海軍の全海
軍艦を海軍の具の兵卒は上降して其の軍を海軍
ありし海軍砲艦を海軍を海軍の軍艦の軍艦の軍艦

一候なり

一候なり

一候なり

一候なり

乙卯長島の海防はむ村を築くこと惟く一月年なり其
を其に日二十日於て海軍野中持守也。は海軍
れ一外其拒絶の期限は其の五日十日とす其定はは其
々軍海軍相替の陳夫持守す。其の敵首の強一海軍
之れは其軍一統に其の五日十日の多其は海軍同海軍
の異艦一白の砲艦の軍艦は其の月には其異艦四つ
各山子子海軍他の砲艦を砲撃し刺して其海軍の全海
軍艦を海軍の具の兵卒は上降して其の軍を海軍
ありし海軍砲艦を海軍を海軍の軍艦の軍艦の軍艦

きの北條路人と信成の海にありて長尾兩藩の間は此
 年の隙を以ては多し高野に於ては其の八月十日に於て
 高野を占めし両藩は其の隙を以ては長尾の海にありて
 ありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 上中川は信成の軍隊を以ては高野の海にありて高野の海にありて
 信成の軍隊を以ては高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 沖口の軍隊を以ては高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 將軍の家系は信成の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて

長古堂史記

月十日信成と高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて

たつたの海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて
 高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて高野の海にありて

高野上

高野上

高野上

高野上

高野上

高野上

高野上

桂

しほたきまのたのしみはあつた

百八

いふにやうなまはるのあつた

甘き

いりもまよはるのあつた

桂

あひまじりすのあつた

桂

あつたのあつた

あつたのあつた

桂

あつたのあつた

桂

あつたのあつた

桂

あつたのあつた

桂

あつたのあつた

桂

あつたのあつた

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

おんぼ

おんぼのうしろあそびのきこひのうしろあそびのきこひ

蛙

いさよのやのなをふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなを
ふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなを

草

空川よりよはひてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなを

清時翁

一物とてふべしなむはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなを

多由住さきなりきよのなをふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなを
ふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなを
ふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなをふりてはまのなを

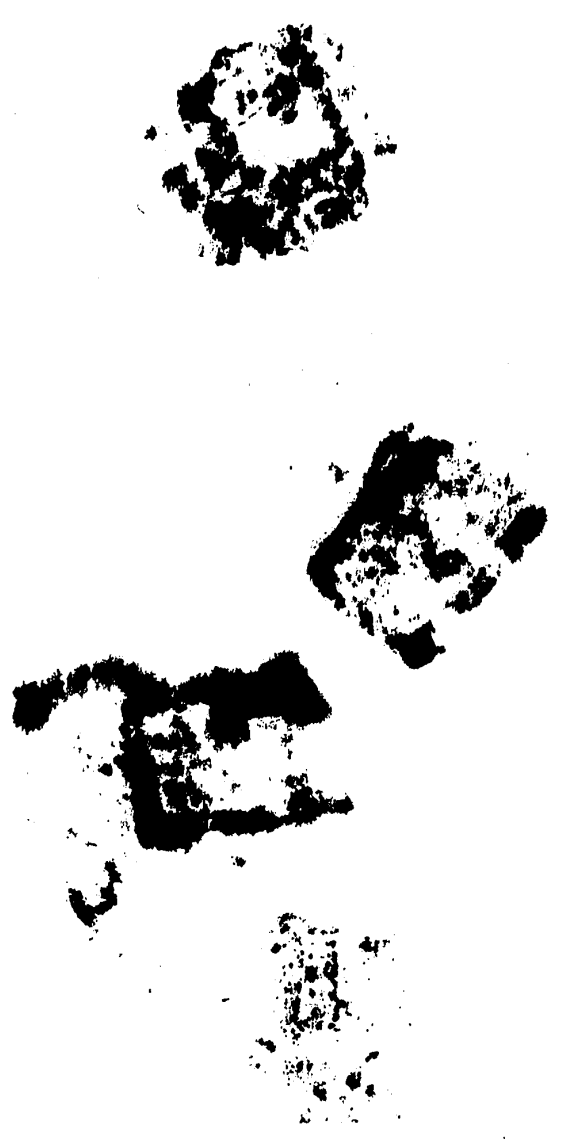


白雲法師



書部

Handwritten text in vertical columns, including the characters 幽雅, 子, 書, 常, 福, and 福. The text is written in a cursive style and includes some large, dark ink blotches.



い乃木

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

書林抄

源朝臣高成

杜若
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

甘芳部

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

廿五日

予が此の月を渡りて、  
一

標

此の月を渡りて、  
一

左様の  
花ト云

予

此の月を渡りて、  
一

廿六日

此の月を渡りて、  
一

廿七日

此の月を渡りて、  
一

標

此の月を渡りて、  
一

廿八日

此の月を渡りて、  
一

廿九日

此の月を渡りて、  
一

三十日

此の月を渡りて、  
一

一

此の月を渡りて、  
一

二

此の月を渡りて、  
一

松小...  
各...  
都...  
海...  
原...  
花...  
山...

松...  
各...  
都...  
海...  
原...  
花...  
山...



林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.

林文

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document.



Handwritten text in a cursive script, likely a list or a series of entries. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list of items or names, possibly related to a collection or inventory.

新集

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or entries from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list of items or names, possibly related to a collection or inventory.

有明  
天啓元年  
九月九日

|                                          |                                          |                                        |                                          |                                          |                                        |                                        |                                          |                                        |                                        |                                            |                                        |
|------------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|--------------------------------------------|----------------------------------------|
| 吉 威<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 吉 威<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 廣<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 招 弟<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 招 弟<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 滿<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 夏<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 福 昌<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 貝<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 崇<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 社 園 友<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 | 昭<br>清 松 邦 彦 大 正 二 年 八 月 廿 一 日 申 酉 時 生 |
|------------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|--------------------------------------------|----------------------------------------|

昭  
 七  
 三  
 七

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, written vertically on the right page of an open book. The text is organized into several lines, with some lines starting with a small symbol resembling a heart or a stylized 'S'. The script is dense and characteristic of historical manuscript writing.

Handwritten text at the bottom of the right page, possibly a signature or a date, written in a similar cursive script.

詠草  
草稿

此草詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文  
詠草の序文

新海流

年々より方よりおらぬ

新海流なる海よりわけて

ありや

川よりおらぬとて川より

牧場

きつておらぬとて川より

新海流なる海よりわけて

ありや

川よりおらぬとて川より

牧場

きつておらぬとて川より

新海流なる海よりわけて

ありや

川よりおらぬとて川より

牧場

きつておらぬとて川より

松原  
あはれなることごとく  
しるすはたけのまはる

左のまはる  
たけのまはる

青園公のあはれ

あはれなることごとく  
しるすはたけのまはる

あはれなることごとく  
しるすはたけのまはる

あはれなることごとく

あはれなることごとく  
しるすはたけのまはる

あはれなることごとく

あはれなることごとく

あはれなることごとく  
しるすはたけのまはる

あはれなることごとく  
しるすはたけのまはる

あはれなることごとく

あはれなることごとく  
しるすはたけのまはる



〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

拓殖系

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは

〇日三をて ありしは ありしは ありしは



Handwritten text in cursive script, likely a list or notes.

Handwritten header or section title.

Handwritten text in cursive script, continuing the notes or list.

Handwritten text in cursive script, possibly a list or notes.

Handwritten text in cursive script, possibly a list or notes.

留所

「お前川の...」

「お前川の...」

「お前川の...」

「お前川の...」

「お前川の...」

「お前川の...」

三日分の待し

「三日分の待し...」

「三日分の待し...」

「三日分の待し...」

「三日分の待し...」

「三日分の待し...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」



いふはたは...  
あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...

あまの...

あまの...  
あまの...

あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...

あまの...

あまの...  
あまの...

あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...

あまの...

あまの...  
あまの...  
あまの...  
あまの...



たのしみ Summer 1955

いよいよ夏が来た

あつたあつた

あつたあつた

右分字

ふねのついでにのりあつた

桶のついでにのりあつた

右分字  
ふねのついでにのりあつた

いよいよ夏が来た

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

いよいよ夏が来た

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた



ふむーまもろちん村の町  
たのきやうの町の町の東の村  
とよまの 礎たふまの いたふが

ちんちん

ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん  
ちんちんちんちんちんちん







清母相  
 弟の...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

仁

兄弟  
 ...

...

...

...





古月板

社名の川原の...  
十日 初詣の...

とくは...  
松岡月

ますて...  
とくは...  
とくは...

全機所

心や...  
梅...  
ま...  
松...

三木

木の...  
三...  
あ...  
ハ...

社...  
は...  
と...  
あ...  
あ...

久、海...

一...  
又...  
り...

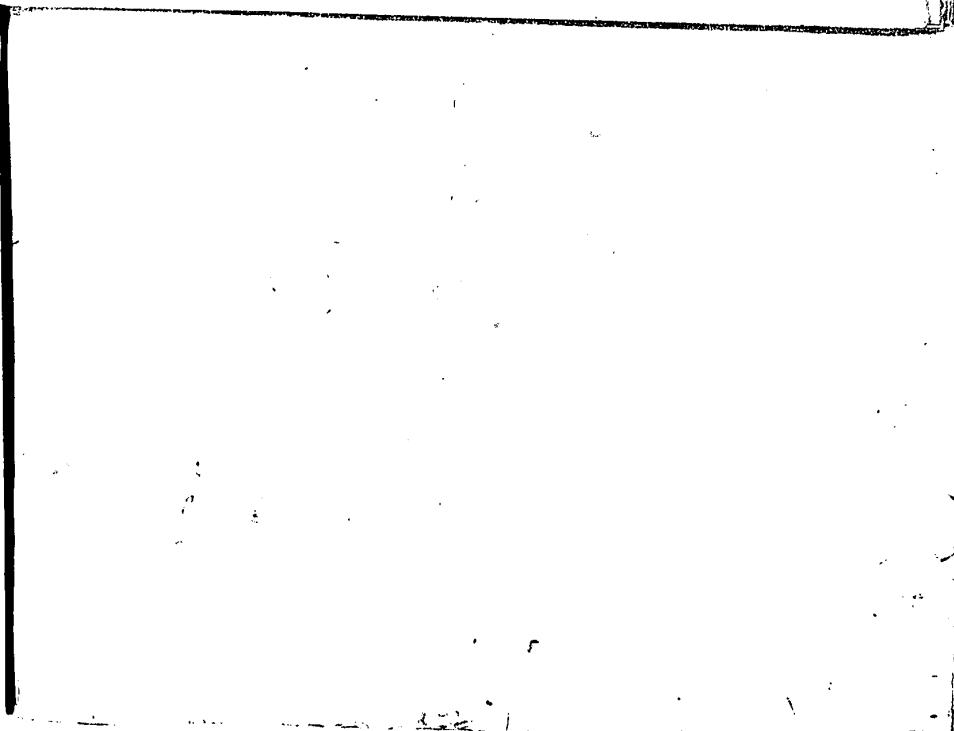


Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a transcription or notes.

Handwritten Japanese text in vertical columns, continuing the transcription or notes.

Handwritten Japanese text in vertical columns, continuing the transcription or notes.

Handwritten Japanese text in vertical columns, continuing the transcription or notes.



Handwritten Japanese text in vertical columns, located in the lower left section of the page.

吾加多耶志保村之御宗海方平徳又  
一、最上人、之傳、語、其、一、た、事、也、  
二、た、人、原、の、傳、の、事、也、  
由、傳、人、事、也、  
其、の、事、也、  
一、た、事、也、

久、海、方、平、徳、

其、の、事、也、  
一、た、事、也、  
其、の、事、也、











おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて  
おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて  
おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて  
おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて  
おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて  
おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて

おしとくに静かなるものゝ中を歩かぬはたかよめて



ふしやうの縁にたゞしあつた  
けしきもまたいふにたゞしあつた  
まはたかゝるゑあつた  
らぬやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた  
いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた  
いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた  
いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた

いふやうにたゞしあつた



Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name.

Handwritten text in cursive script, appearing to be a name or title.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, possibly a name.

先哲者云曰 志了心而思 志了思而德  
者 即大未也 名對言也 今之野  
長官言士 所保之 歌八頗 亦如符令  
而少之 莫能之 人云此心而可平  
付世甚 子懷感 歎 聊記 而解  
之云

formosa in the  
mountainous region  
of the island of  
Sulawesi

長月平吉  
長月平吉

源實

源實

源實

源實

源實

源實

源實

歌集

~~~~~

海防

~~~~~

~~~~~

行集

~~~~~

海防

~~~~~

行集

~~~~~

海防

~~~~~

行集

~~~~~

二 庭園

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。庭園は、建築の機能を補完し、生活の質を高める役割を担う。

三 庭園

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。庭園は、建築の機能を補完し、生活の質を高める役割を担う。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

四

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

庭園の設計は、建築の延長線上にあり、かつ、その環境に調和を成すことを第一とする。

標 木のしちん草<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 標 木<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 書<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 香<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 標 白<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 印<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 相<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 標 木<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 可<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>

標 木のしちん草<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 標 木<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 書<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 香<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 標 白<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 印<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 相<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 標 木<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>  
 可<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>の<sup>（シロアザミ）</sup>



梅

*Prunus mume* (梅) 花は五瓣、白く、香気あり。葉は濃緑、革質。冬は葉が落ち、花は冬から春にかけて咲く。

楊

*Salix* (楊) 葉は狭長卵形、縁に鋸歯あり。花は小く、雄花と雌花とあり。冬は葉が落ち、花は春に咲く。

柳

*Salix* (柳) 葉は狭長卵形、縁に鋸歯あり。花は小く、雄花と雌花とあり。冬は葉が落ち、花は春に咲く。

梨

*Erythrina* (梨) 葉は三出複葉、花は蝶形、赤く、香気あり。果実は球状、赤く熟すと黒くなる。

椎

*Quercus* (椎) 葉は長卵形、縁に鋸歯あり。花は小く、雄花と雌花とあり。果実は球状、熟すと硬くなる。

杜若

*Delphinium* (杜若) 葉は三出複葉、花は鐘形、青く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

牡丹

*Paeonia* (牡丹) 葉は複葉、花は大く、重瓣、色は多種あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

萱

*Phalacroglauca* (萱) 葉は線形、花は穂状、青く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

菖

*Phalacroglauca* (菖) 葉は線形、花は穂状、青く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

海防草 *Pluchea odorata* (海防草) 葉は長卵形、縁に鋸歯あり。花は穂状、青く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

百重桂 *Albizia julibrissin* (百重桂) 葉は三出複葉、花は鐘形、白く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

合前 *Albizia julibrissin* (合前) 葉は三出複葉、花は鐘形、白く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

合前 *Albizia julibrissin* (合前) 葉は三出複葉、花は鐘形、白く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

再考 *Albizia julibrissin* (再考) 葉は三出複葉、花は鐘形、白く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

由志 梓 *Albizia julibrissin* (由志) 葉は三出複葉、花は鐘形、白く、香気あり。果実は球状、熟すと硬くなる。

老水

枇杷

あま

花

五月廿三日

この日は、晴れ、気温は25度、湿度は70%、風速は10km/h、

午後

15時、雨が降る。気温は22度、湿度は85%、風速は5km/h、

午後

18時、雨が止む。気温は20度、湿度は90%、風速は3km/h、

午後

21時、雨が降る。気温は18度、湿度は95%、風速は2km/h、

午後

24時、雨が止む。気温は15度、湿度は100%、風速は1km/h、

星野重光

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

著(高田重光)

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

樹屋抄

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

かきつけりて

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

かきつけりて

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

かきつけりて

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

かきつけりて

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

かきつけりて

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

かきつけりて

かきつけりてふらんをばつらぬかきつけりてふらんを

會家書

新書よたつるをなす村の惣書とてあつた

古書傳

なす村の... 國... 海... 山...

海... 山...

www... 山... 海...

海...

山...

山... 海... 山... 海...

新書...

山... 海... 山... 海...

山...

山... 海... 山... 海...

山... 海...

山... 海... 山... 海...

山...

山... 海... 山... 海...

かきつばた  
かきつばたを飼育してはるるに  
はるるに飼育してはるるに

かきつばた

抱く

かきつばたを飼育してはるるに

抱く

かきつばたを飼育してはるるに  
かきつばたを飼育してはるるに

抱く

かきつばたを飼育してはるるに

抱く

かきつばたを飼育してはるるに

抱く

かきつばたを飼育してはるるに

抱く

men  
...  
...  
...  
...

大橋

...

橋

...

橋

...

橋

...

橋

...

橋

...

...

申の日のに於ては  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと  
しつかりと

奉天満神は歌

源朝臣家也

秋夕文

即の者にして

露の

露の

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a short note.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a short note.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a short note.



Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

祈願

お申す事あるは心願の事なり  
かこころの事ありは祈願なり

Handwritten text in the middle section, possibly a prayer or request.

春の休二十五日

源 家也

三林

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or date.

庭より、竹の影

秋の風、海を渡る

いづこか、ほたるの光

たふさふさ、昔の古の  
の、  
♪

いよ、  
梅より、

梅より、

東京府立第一中学校

校長 佐々木 謙三

行司

社務科

上野

東京府立第一中学校

校長 佐々木 謙三

東京府立第一中学校

校長 佐々木 謙三

東京府立第一中学校

校長 佐々木 謙三

校長 佐々木 謙三

行馬

社務科

上  
部

野  
山  
山  
山

野山山山

野山山山

野山山

野山山山

野山山山

野山山山

野山山山

野山山山

野山山山

行馬

社民知

智馬

智馬

智馬

智馬

智馬

智馬

智馬

智馬

智馬

智馬

行馬

後馬

智馬

Longer than the natural symmetry

Longer than the natural symmetry

Longer than the natural symmetry

智の教養

智の教養

智の教養

Handwritten vertical text on the left edge of the notebook page.

行馬

社理板

Handwritten vertical text on the top edge of the notebook page.

Handwritten vertical text on the left side of the notebook page.

Handwritten vertical text on the left side of the notebook page.

Handwritten vertical text on the left side of the notebook page.

Handwritten vertical text on the left side of the notebook page.

Handwritten vertical text on the left side of the notebook page.

Handwritten vertical text on the left side of the notebook page.

Handwritten vertical text on the right side of the notebook page.

Handwritten vertical text on the right side of the notebook page.

11-1-1

随時毎刻

行る

社政板

望の  
まの  
まの  
まの

法人の  
御

あ  
校

ま  
ま

い  
と  
御  
御

あ  
ま  
ま

あ  
ま  
ま

あ  
ま  
ま

あ  
ま  
ま  
信  
感

あ  
ま  
ま  
ま

あ  
ま  
ま  
ま



朝  
あけぼのうららかに  
あけぼのうららかに  
あけぼのうららかに

行  
る

喜  
ば  
ら  
し  
き  
な  
ら  
し  
き  
な  
ら  
し  
き

皆  
人の  
作  
り  
か  
ら  
し  
き  
な  
ら  
し  
き  
な  
ら  
し  
き  
な  
ら  
し  
き  
な  
ら  
し  
き

真公の御書に云ふに  
御書に云ふに

いふに云ふに  
御書に云ふに

御書に云ふに

御書に云ふに

御書に云ふに

御書に云ふに

御書に云ふに

御書に云ふに

御書に云ふに

御書に云ふに

PAID: J. D. ...

George Washington ...  
2/1/18...

Washington

Washington ...  
George Washington ...  
Washington ...

6 ...

Good night, good night

to the good people

of the good world

to the good people

Good night

to the good people

of the good world



